

熊本大学永青文庫研究センター
における組織評価
自己評価書

平成 30 年 9 月 30 日
33 永青文庫研究センター

目次

I	熊本大学永青文庫研究センターの現況及び特徴	2
II	研究の領域に関する自己評価	4
	1. 研究の目的と特徴	5
	2. 優れた点及び改善を要する点	7
	3. 観点ごとの分析及び判定	7
	4. 質の向上度の分析及び判定	14
III	社会貢献の領域に関する自己評価書	15
	1. 社会貢献の目的と特徴	16
	2. 優れた点及び改善を要する点の抽出	17
	3. 観点ごとの分析及び判定	17
	4. 質の向上度の分析及び判定	33
IV	国際化の領域に関する自己評価書	35
	1. 国際化の目的と特徴	36
	2. 優れた点及び改善を要する点の抽出	36
	3. 観点ごとの分析及び判定	36
	4. 質の向上度の分析及び判定	40
V	管理運営に関する自己評価書	41
	1. 管理運営の目的と特徴	42
	2. 優れた点及び改善を要する点の抽出	42
	3. 観点ごとの分析及び判定	42
	4. 質の向上度の分析及び判定	48

I 熊本大学永青文庫研究センターの現況及び特徴

1 現況

- (1) 学部等名：熊本大学永青文庫研究センター
- (2) 学生数及び教員数（平成30年5月1日現在）
専任教員数（現員数）：2人、助手数（0人）

2 特徴

熊本大学永青文庫研究センター（以下、「本センター」と略記）は、肥後細川家に伝来した永青文庫資料をはじめとする熊本藩関係資料を調査・研究する施設である。肥後細川家は、戦国時代は室町幕府や織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕え、江戸時代には熊本を統治した大名家として知られる。永青文庫資料には、細川家に関わる「御家の資料」と熊本藩の行政資料である「藩庁の資料」の双方が豊富に残されており、全国の大名家資料群のなかでも質量ともにトップレベルにある。

永青文庫資料は、1964年に細川家から熊本大学附属図書館に寄託され、以後、熊本大学の教員を中心に研究が進められてきた。しかし、資料群が膨大なために全容の把握には至らず、利活用の進展が国内外から長年待望されていた。その要望に応えるため、2009年度に熊本大学文学部附属永青文庫研究センターが発足した。肥後銀行をはじめ、熊本放送文化振興財団や熊本の有志の方々からの寄付金で設けられた「永青文庫常設展示振興基金」を主たる財源として、運営は支えられた。

発足以後、同センターは、永青文庫資料総目録の完成（2015年）、全5冊におよぶ資料集『永青文庫叢書』（吉川弘文館、2010～2014年）の刊行、または国内外における共同研究の実施など、数多くの研究実績を積み重ねた。こうした目覚ましい実績を背景として、本学の第3期中期計画では、同センターを中核的な社会連携・社会貢献拠点とするために、2017年度に学内共同教育研究施設とし、拠点形成研究「永青文庫細川家資料の総合的解析による歴史社会・文化研究拠点の形成」を社会連携・社会貢献の重点領域に位置づけることが明記された（計画番号36）。そして中期計画に即して、2017年度から同センターは文学部附属を離れ、学内共同教育研究施設へと改組された。

改組を契機として、本センターの運営資金も大きく変化した。2017年度よりセンターの事業が国の概算要求予算事業「熊本藩大名家資料群の総合的分析による日本近世史研究拠点・歴史文化情報発信拠点の形成」として採択され、5年間の予算配分を受けることになった。また、本学の重点研究支援事業である「みらい研究推進事業」にも、「熊本藩資料群の総合的解析による日本近世史研究拠点の形成」が採択され、2017年度より3年間、研究資金が配分されることになった。

本センターの業務は以下の通りである（熊本大学永青文庫研究センター規則による）。

- (1) 永青文庫資料等の総合的研究に関すること。
- (2) 永青文庫資料等による地域文化の研究に関すること。
- (3) 永青文庫資料等による文化創造事業の実施に関すること。
- (4) 永青文庫資料等の研究に係る文化行政機関等との連携及び支援に関すること。
- (5) 日本史の拠点形成研究及び研究の国際化に関すること。
- (6) その他センターの目的を達成するために必要な事項。

上記の業務からもうかがえるように、本センターの特徴は旺盛な研究活動とともに、積極的な社会貢献活動にある。研究成果は、一般市民向け講演会、美術館・博物館と連携した展覧会、新聞・雑誌への寄稿等を通じて、広く社会に発信され続けている。地元のマスコミはもちろん、日本テレビの「くりいむしちゅーの歴史新発見 信長59通の手紙を解読せよ」（2015年2月放送）や、NHKの「ブラタモリ」（2016年2月）、「NHKスペシャル」（2017

年4月、2018年4月)等の全国放送で取り上げられたことも多い。

また、本センターでは、古文書の日録作成作業などに学生・大学院生が参加している。文学部の専門教育と連動することで、学生たちの史料解析能力は鍛えられ、卒業生の多くが博物館や自治体等の学芸職として活躍している。こうした人材育成も、本センターの特徴の一つである。

なお、2018年5月時点のスタッフは、センター長(専任教員)1名、専任教員1名、兼務教員3名、研究員1名、事務補佐員1名である。

3 組織の目的

本センターの設置目的は以下の通りである(熊本大学永青文庫研究センター規則による)。

センターは永青文庫資料等の総合的な研究を通じて当該資料に立脚した拠点的研究を組織するとともに、文化行政機関等との連携によって地域文化振興に貢献し、もって熊本大学の教育、研究及び社会貢献活動の充実発展に寄与することを目的とする。

なお、上述のように学内共同教育研究施設としての本センターの活動は2017年度のみであるが、本評価書では2016年度の活動も対象とする。

Ⅱ 研究の領域に関する自己評価

1. 研究の目的と特徴

永青文庫研究センター（以下、「本センター」と略記）の研究目的は、以下のように示されている。

資料Ⅱ-1-A

永青文庫資料をはじめとする熊本藩関係資料の総合的な研究を通じて当該資料に立脚した拠点的研究を組織するとともに、文化行政機関等との連携によって地域文化振興に貢献し、もって熊本大学の教育、研究及び社会貢献活動の充実発展に寄与することを目的とする。

（出典：熊本大学永青文庫研究センター規則）

本学全体における本センターの位置づけ、および設置理由は以下のように述べられている。

資料Ⅱ-1-B

熊本大学は「国際的な研究拠点を志向する地域起点型大学」として、地域社会や国際社会と緊密につながりつつ、高度なレベルで教育・研究・社会貢献に取り組むことを目的に掲げている。こうした取組を人文社会科学分野から発展させるためには、数ある大名家資料群のうちでも質量ともに最高レベルにある「熊本大学寄託永青文庫資料」をはじめとする熊本藩関係資料を対象とした永青文庫研究を、本学ならではの特色ある研究・社会貢献重点領域と位置付け、事業を一層推進していくことが有効である。

平成 21 年に設置された文学部附属永青文庫研究センターにおける研究事業、社会貢献事業の成果を踏まえつつ、本センターを学内共同教育研究施設に改組して事業展開の一層の拡充をはかる。

永青文庫資料等の総合的な研究を通じて当該資料群に立脚した拠点的研究を組織し、かつ文化行政機関等との連携によって地域文化振興に貢献し、もって人文社会科学分野を中心とした研究及び文化振興の発展に寄与する人材の育成に資することを目的として、本センターを設置することとする。

（出典：熊本大学永青文庫研究センターHP）

また、本学の第3期中期目標にも、重点研究としての「永青文庫研究」の位置づけが、以下のように明記されている。

資料番号Ⅱ-1-C

研究面では、国際的研究拠点大学（研究大学強化促進事業）として、生命科学領域における発生再生医学やエイズ学、及び自然科学領域における先進マグネシウム合金や衝撃エネルギー科学に代表される世界を切り拓くオンリーワンの研究分野に「国際先端研究拠点」を設置し、世界レベルの研究を拡充・展開する。また、人文社会科学領域においては、本学の特色である「永青文庫研究」や「教授システム学研究」を重点研究として位置づけ、国際通用性の高い研究を展開する。

（出典：熊本大学 HP）

以上をふまえ、本センターの具体的な研究活動は以下のように示される。

資料番号Ⅱ-1-D

センターでは、研究プロジェクト3分野（近世初期藩政史研究、近世中期法制史研究、幕末維新时期社会史研究）により研究を進め、以下の活動を推進する。

1. 資料集の出版活動（第2期「永青文庫叢書」など
2. 永青文庫藩政史料や松井家文書等を活用した近世社会研究の拠点組織化
3. 中国・安徽大学（国家教育部人文社会科学重点研究基地）等との大学間交流協定に基づく研究の国際化
4. 永青文庫資料の細目録作成、松井家文書の目録作成を推進

（出典：熊本大学永青文庫研究センターHP）

[想定する関係者とその期待]

主要な関係者としては、熊本大学関係者、国内外の歴史学研究者（とくに日本史研究者）、国・地方公共団体の文化行政諸機関および関係者、国内の博物館・美術館、日本史に興味をもつ一般市民などが想定される。

期待される効果は以下のとおりである。

資料番号Ⅱ-1-E

1. 永青文庫資料を活用した人文社会科学研究の拠点としての熊本大学の存在を国内外にアピールし、優秀な人材の確保と特色ある教育・研究拠点への発展が可能となる。
2. 共同研究を発展させ、国際的な研究の中に位置付けることで、人文社会科学系における国際先端研究機構整備の核を形成することができる。
3. 文化行政諸機関との連携事業を通じて近世熊本藩地域文化研究の成果を社会に還元し、かつ永青文庫資料群の国指定の前提となる基礎研究を推進することで、地域文化振興へのより積極的な貢献が可能となる。
4. 学生・大学院生を現物資料解析作業に従事させることで、資料学に立脚した力量ある若手研究者及び文化行政担当者が育成・輩出される。

（出典：熊本大学永青文庫研究センターHP）

2. 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

1. 本学の第3期中期計画では、本センターを中核的な社会連携・社会貢献拠点とするために、学内共同教育研究施設へ改組することが明記された（計画番号36）。2009年度の文学部附属永青文庫研究センター発足以来、積み重ねられてきた研究・教育・社会貢献の実績をふまえ、本センターは2017年度、学内共同教育研究施設になった。中期計画を着実に遂行した点は高く評価できる。
2. 専任教員の研究活動に関しては、研究業績全般、外部資金の獲得状況、学内研究助成金の獲得状況、いずれにおいても極めて高い水準にあり、本センター教員の研究活動は極めて活発である。加えて、2017年度の学内共同教育研究施設への改組を契機として、研究業績や外部資金の獲得件数が飛躍的に向上したことは特筆すべきである。
3. 永青文庫研究センタースタッフ（専任教員2名、特別研究員1名）による2016-2017年度の研究成果（論文・著書）の総数は24本（専任教員は19本）で、そのうちSSとSの水準にある論文・著書は合計2本である。これは全スタッフ3名の66%、専任教員数2名の100%に当たる驚異的な数値である。

【改善を要する点】

研究活動及び研究成果において特段改善を要する点はない。但し、膨大な日常業務量を僅かなスタッフ（専任教員2名、特別研究員1名）で担っているため、個人あたりの負担が過重な傾向にある。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

（観点到に係る状況）

- ・第3期中期計画では、永青文庫研究センターなど人文社会科学の特質を活かした多様な研究の質的向上を目指し、拠点形成研究では、論文数などが前期比1を上回ることが明記されている（計画番号24）
平成28年度、平成29年度の主な研究活動は以下のとおりである（資料B1-1-1）。

資料 B1-1-1 主な研究活動状況

論文・著書数：19点（24点） ※（ ）内は特別研究員を含む数値
 学会発表数：13件
 科学研究費採択件数：8件
 受託研究：1件
 拠点形成研究採択件数：2件

（出典：資料 B1-1-1～B1-1-4 を基に作成）

- ・本センタースタッフ（専任教員2名、特別研究員1名）における論文・著書・学会発表の状況（資料B1-1-2）である。これをみると、2017年度の学内共同教育研究施設への改組を契機として、研究業績が飛躍的に伸びていることが明らかである。

具体的な研究業績の一覧は以下のとおり。

資料 B1-1-2 論文・著書・学会発表の状況

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
論文・著書	2	6	3	5(7)	14(17)
学会発表	2	0	2	2	11

※ () 内は特別研究員を含む数値
(出典：永青文庫研究センター年俵)

◇稲葉継陽教授

<2016年度>

【論文】

- ① 「16世紀日本における領域秩序の変動と近世国家」(佐藤公美編『アルプスからのインターローカル・ヒストリー <地域>から<間地域>へ』(佐藤公美研究室、2016年3月、pp.93-101)
- ② 「書評 水本邦彦著『百姓たちの近世』」(『新しい歴史学のために』288、2016年5月、pp.77-84)
- ③ 「島原・天草一揆と「天下泰平」」(南島原市×西南学院大学博物館連携特別展図録『原城落城のとき—禁教・潜伏への道のり—』、2017年2月、pp.43-49)
- ④ 「古文書から読み解く震災—地域史料の保全と地域の持続—」(岩岡中正・高峰武編『熊本地震2016の記憶』弦書房、2017年3月、pp.130-147)
- ⑤ 「加藤清正と熊本城下町」(『大学的熊本ガイド』昭和堂、2017年3月、pp.3-19)

【研究発表】

- ① 「村落共同体における領域生成—山野河海の共同体的領有をめぐる—」シンポジウム「海を越える異文化交流 安徽大学と熊本大学を繋げる中日異文化交流フォーラム」、2016年5月21日、安徽大学(中国)
- ② 「熊本地震後の被災史料レスキュー活動について」東京大学地震研究所地震・火山噴火予知研究協議会「平成28年熊本地震シンポジウム」、2016年10月26日、熊本市国際交流会館

<2017年度>

【著書・論文】

- ① 「総論 細川家臣団起請文にみる熊本藩「国家」の形成」(公益財団法人永青文庫平成27年春季展図録『細川家起請文の世界』、2017年12月、pp.5-9)
- ② 「熊本における被災文化財レスキュー活動」(『歴史学研究』961、2017年9月、pp.18-21)
- ③ 「「天下泰平」の確立と細川家」(『季刊 永青文庫』100、2017年12月、pp.7-14)
- ④ 「Movable Cultural Properties」(『The Kumamoto Earthquake-Report on the Damage to the Cultural Heritage-』、2017年12月、pp.71-73)
- ⑤ 『近世熊本城の被災と修復』(稲葉継陽・後藤典子編著、第33回熊本大学附属図書館貴重資料展解説目録、2017年11月、全18頁)

【研究発表】

- ① 「Popular Revolts And Violence In 16th Century Japan」国際歴史会議「ICHHS シンポジウム ANATOMY OF CIVIL WAR」、2017年9月28日、ロシア科学アカデミー
- ② 「初期小倉藩・熊本藩の手永制と惣庄屋」九州文化史共同研究会「近世小倉藩・熊本藩における手永制の研究」、2017年10月7日、九州大学西新プラザ

◇今村直樹准教授(2017年度着任)

<2017年度>

【著書・論文】

- ① 「近世後期日本の『地方税』を考える—熊本藩領の会所官銭と会所並村出米銭を事例に一」(『熊本近代史研究会会報』548号、2017年8月、pp.2-10)
- ② 「成長とマクロ経済」(高島正憲・深尾京司と共著、深尾京司・中村尚史・中林真幸編『岩波講座日本経済の歴史 第2巻 近世』岩波書店、2017年8月、pp.2-22)
- ③ 「所得と資産の分配」(中林真幸と共著、同上『岩波講座日本経済の歴史 第2巻 近世』、pp.33-60)
- ④ 「鉱工業生産の数量的接近」(同上『岩波講座日本経済の歴史 第2巻 近世』、pp.216-238)
- ⑤ 「生産・物価・所得の推定」(深尾京司・斎藤修・高島正憲と共著、同上『岩波講座日本経済の歴史 第2巻 近世』、pp.283-300)
- ⑥ 「近世後期日本における百姓の『身上り』運動と村—熊本藩領の事例から—」(羽賀祥二編『近代日本の地域と文化』吉川弘文館、2018年3月、pp.130-157)
- ⑦ 「廃藩置県後の細川家当主所用甲冑と旧家臣」(『永青文庫研究』創刊号、2018年3月、pp.5-34)
- ⑧ 「幕末・明治前期における茶生産の地域的展開—熊本藩(県)域を事例に一」(静岡大学『アジア研究』別冊8号、2018年3月、pp.5-17)
- ⑨ 「永青文庫研究・熊本被災資料レスキュー活動と歴史教育」(『歴史教育の地域的基盤形成を促進する教材・教授方法の探究と高大連携の継続 平成29年度人文社会科学部学部長裁量経費成果報告書』静岡大学人文社会科学部社会学科歴史学コース、2018年3月、pp.25-30)

【研究発表】

- ① 「近世後期熊本藩領における『身上り』運動と村」熊本史学会春季研究発表大会、2017年6月、熊本県婦人会館
- ② 「熊本被災史料レスキューネットワークの活動と課題」全国歴史民俗系博物館協議会第6回年次集会、2017年7月、九州国立博物館
- ③ 「近世日本の『地方税』を考える—熊本藩領の会所官銭と会所並村出米銭を事例に一」熊本近代史研究会7月例会、2017年7月、熊本市現代美術館
- ④ 「蕨山代官江川氏の土地所有権と明治維新」静岡大学日本史研究会、2017年7月、静岡大学人文社会科学部
- ⑤ 「文政期の徳川将軍家養子一件と熊本藩」熊本藩研究会、2017年9月、熊本大学文学部
- ⑥ 「シンポジウム『近世の駿豆地域と蕨山代官江川氏』趣旨説明」2017年度静岡県地域史研究会シンポジウム、2017年9月、静岡県男女共同参画センターあざれあ
- ⑦ 「明治初年の旧蕨山代官江川氏と『御囲地』」静岡県地域史研究会1月例会、2018年1月、静岡県男女共同参画センターあざれあ
- ⑧ 「近世後期藩領国の地域行政と明治維新」「公議」研究会、2018年3月、ルノール貸会議室プラザ
- ⑨ 「近代移行期日本の統治権力と郷領域」日印朝科研研究会、2018年3月、東京大学農学部

◇後藤典子特別研究員

<2016年度>

【論文】

- ① 「近世初期熊本城の被災と修復」(『総合文化誌 kumamoto』No.16、2016年9月、pp.58-63)
- ② 「細川忠利期における熊本城普請—近世初期の城普請・公儀普請・地方普請—」(『熊本大学文学部附属永青文庫研究センター 年報』第8号、2017年3月、pp.1-42)

< 2017 年度 >

【著書・論文】

- ① 『近世熊本城の被災と修復』（稲葉継陽・後藤典子編著、第 33 回熊本大学附属図書館貴重資料展解説目録、2017 年 11 月、18 頁）
- ② 『熊本城の被災修復と細川忠利—近世初期の居城普請・公儀普請・地方普請—』（熊本日日新聞社、2017 年 12 月、230 頁）
- ③ 「小倉藩細川家の葡萄酒造りとその背景」（『永青文庫研究』創刊号、2018 年 3 月、pp.35-54）

・本センター専任教員による科学研究費等の採択の状況（資料 B1-1-3）である。2017 年度の学内共同教育研究施設の改組後、科学研究費の獲得件数が飛躍的に向上したことがわかる。

資料 B1-1-3 科学研究費補助金等の採択状況

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
科学研究費補助金	1	1	2	2	6
受託研究	1	1	1	1	
寄附金					1

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	合計
科学研究費補助金	11,000	3,750	3,400	5,960	24,110
運営費交付金				8,293	8,293
共同研究					0
受託研究	4,950	4,950	2,269		12,169
寄附金				100	100
計	15,950	8,700	5,669	14,353	44,672

（出典：人文社会科学系事務課資料）

・拠点形成研究に関しては、平成 26-28 年度の「拠点形成研究 A」に続き、平成 29 年度からは新たに「みらい研究推進事業」に採択された（資料 B1-1-4）。2 期連続での採択であり、学内的にも本センターの研究が極めて重要視されていることが明らかである。

資料番号 B1-1-4 拠点形成研究の採択状況

区分	プロジェクト名	配分額	総計
拠点形成研究 A	永青文庫細川家資料の総合的解析による歴史社会・文化研究拠点の形成	平成26～28年度 各500万円	1,500万円
みらい研究推進事業	熊本藩資料群の総合的解析による日本近世史研究拠点の形成	平成29～31年度 各1,000万円	3,000万円

(水準)

- ・期待される水準を上回る。

(判断理由)

- ・対象期間における本センターの専任教員は平均 1.5 人（平成 28 年度 1 人、29 年度 2 名）である。研究実績を 1 人あたりで平均すると、1 年間に論文・著書が 6.3 本、学会発表が 5 本、科学研究費 2.6 件である。また、拠点形成研究は 2 年連続で採用されている。日常的な業務である永青文庫資料などの整理・調査、後述する社会貢献に忙殺され、さらに 2016 年 4 月の熊本地震後、ボランティアで行っている被災歴史資料のレスキュー活動に従事するなかで、上記の実績をあげていることは驚異的である。
- ・2016・2017 年度の論文・著書数、学会発表数、科学研究費採択数は、それ以前に比べて飛躍的に向上しており、中期計画を十分に達成するものとなっている。

観点 大学の共同利用・共同研究拠点に認定された付置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況)

該当なし

(水準)

なし

(判断理由)

なし

分析項目Ⅱ研究成果の状況

観点 研究の成果（大学の共同利用・共同研究拠点に認定された付置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。

(観点に係る状況)

- ・第 3 期中期計画では、国際共同研究拠点等により、国際シンポジウム等の開催を通して国際共同研究を推進することが明記されている（計画番号 25）。
- ・永青文庫研究センタースタッフ（専任教員 2 名、特別研究員 1 名）による 2016-2017 年度の研究成果（論文・著書）の総数は 24 本（専任教員は 19 本）で、そのうち SS と S の水準にある論文・著書は合計 2 本である。

資料 B2-1-1 SS・S の論文

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
SS業績（学術的意義）			1		
SS業績（社会、経済、文化的意義）					1
S業績（学術的意義）					
S業績（社会、経済、文化的意義）					1

(出典：永青文庫研究センター事務室資料をもとに作成)

・本センターの研究活動は、社会的にも非常に高く評価されている。文学部附属時代に刊行した『熊本大学寄託永青文庫資料総目録』（全 4 巻、2015 年）、『永青文庫叢書 細川家文書』（全 5 巻、吉川弘文館、2010-2014 年）は、2017 年 5 月、熊本芸術文化学術振興市民財団から第 4 回市民財団奨励賞を受賞した（賞金 10 万円）。

- ・研究成果に関わる国内外での基調・招待講演等の数も多い（2016年度2件、2017年度4件）。

本センター教員による講演等の一覧（資料 B2-1-3）は下記のとおりであるが、特筆されるのは、中国の安徽大学で開催された日中共同研究会や、モスクワで開催された国際歴史会議に報告者として招致され、いずれも参加者から高い評価を受けた点である。

資料番号 B2-1-3 研究成果に関わる国内外の学会での基調・招待講演等

○稲葉継陽教授

<2016年度>

- ・「村落共同体における領域生成—山野河海の共同体的領有をめぐる—」シンポジウム「海を越える異文化交流 安徽大学と熊本大学を繋げる中日異文化交流フォーラム」、2016年5月21日、安徽大学（中国）
- ・「熊本地震後の被災史料レスキュー活動について」東京大学地震研究所地震・火山噴火予知研究協議会「平成28年熊本地震シンポジウム」、2016年10月26日、熊本市国際交流会館

<2017年度>

- ・「Popular Revolts And Violence In 16th Century Japan」国際歴史会議「ICHHSシンポジウム ANATOMY OF CIVIL WAR」、2017年9月28日、ロシア科学アカデミー
- ・「初期小倉藩・熊本藩の手永制と惣庄屋」九州文化史共同研究会「近世小倉藩・熊本藩における手永制の研究」、2017年10月7日、九州大学西新プラザ

○今村直樹准教授

<2017年度>

- ・「近世後期熊本藩領における『身上り』運動と村」熊本史学会春季研究発表大会、2017年6月、熊本県婦人会館
- ・「熊本被災史料レスキューネットワークの活動と課題」全国歴史民俗系博物館協議会第6回年次集会、2017年7月、九州国立博物館

・本センターの研究活動は、新聞・テレビなどの国内メディアに取り上げられることが多い。具体的には、後藤典子特別研究員による近世熊本城の地震被災状況に関する研究、近世初期小倉藩におけるワイン製造に関する研究である。

・本センター専任教員は、地方公共団体における文化行政関係の委員および自治体史編纂委員などを多く歴任し、専門的知見の社会的な還元に努めている（資料 B-2-1-5）。

資料番号 B2-1-5 地方公共団体等の審議会委員等

名称
人吉城跡調査検討委員
佐敷城跡調査検討委員（芦北町）
宇土城跡調査検討委員
菊之城史跡調査検討委員会（菊池市）
棚底城跡活用計画策定委員（天草市）
上天草市史編纂委員
肥後の水とみどりの愛護基金理事
熊本県文化財保護審議会委員
平成29年被災文化財等復旧復興基金配分委員（熊本県）
熊本県議会史編纂委員
新修豊田市史編さん委員会調査執筆協力員
愛知県史編さん委員会調査執筆委員
伊豆の国市史跡等整備調査委員会委員
宇土市高月邸保存活用検討会委員

（出典：人文社会科学系事務課資料）

・研究内容が政策形成・実施に寄与した象徴的な事例としては、細川忠興・忠利発給文書群の熊本県文化財への指定がある（資料 B2-1-6）。

資料番号 B2-1-6

<p>）細川忠興・忠利発給文書群の熊本県文化財への指定</p> <p>2018年2月27日に開催された熊本県文化財保護審議会にて、熊本大学附属図書館に保管されている慶長5年（1600）から正保2年（1645）までに細川忠興・忠利・光尚の三代の間で取り交わされた書状の原本及び写し 2,363 点が、熊本県文化財に指定された。指定文書群は以下の4つの系統から成る。</p> <p style="text-align: center;">（中略）</p> <p>以上のように、指定文書群は肥後細川家に伝わった近世初期の政治史・藩政史研究の第一級の資料であり、文書の状態も極めて良好である。</p> <p>本文書群の指定には、永青文庫研究センターが作成した熊本大学寄託永青文庫細川家資料総目録が活用された。本センターの基礎研究の成果が文化財保護行政に直接活かされたことは特筆に値する</p>
--

（出典：『熊本大学永青文庫研究センター年報』第9号）

・研究紀要『永青文庫研究』には、本センタースタッフとともに、共同研究のメンバーである神戸大学・筑波大学の教員も寄稿している（資料 B2-1-7）。『永青文庫研究』は国内の主要研究機関に配布しているが、研究者からの問い合わせも非常に多く、早々に初版の400部がなくなり、その後100部を増刷している。

資料 B2-1-7 『永青文庫研究』目次

<p>創刊の辞</p> <p>稲葉継陽（本センター長）</p> <p>論文</p>

廃藩置県後の細川家当主所用甲冑と旧家臣 今村直樹（本センター准教授） 研究ノート 小倉藩細川家の葡萄酒造りとその背景 後藤典子（本センター特別研究員） 史料紹介 金納御手伝普請をめぐる熊本藩の対幕府交渉記録 高槻泰郎（神戸大学准教授） 杉谷雪樵筆「天草絵図」 水野裕史（筑波大学助教） 書評 後藤典子著『熊本城の被災修復と細川忠利』 北垣聰一郎（金沢城調査研究所）

（出典：永青文庫研究）

（水準）

- ・期待される水準を上回る。

（判断理由）

- ・2016年6月、大学間国際交流協定を締結した中国の安徽大学で、学長も同席した国際シンポジウムを開催した。永青文庫研究の成果を報告するとともに、中国歴史社会との比較検討を行い、研究の国際化に向けた大きな足掛かりを得た。
- ・SSとSの水準にある論文・著書2本は、本センタースタッフ3名の66%、専任教員数2名の100%に当たる驚異的な数値である。この2本をはじめとして、本センターの研究成果は、国内のメディアに頻繁に取り上げられるなど、高い評価を受けている。
- ・研究紀要『永青文庫研究』には、本センタースタッフとともに、共同研究のメンバーである神戸大学・筑波大学の教員も寄稿している。
- ・『永青文庫研究』は国内の主要研究機関に配布しているが、研究者からの問い合わせも非常に多く、早々に初版の400部がなくなり、その後100部を増刷している。

4. 質の向上度の分析及び判定

（1）分析項目Ⅰ 研究活動の状況

重要な質の変化あり。大きく改善、向上している。

本センターの研究活動を、過去4年間にあたる文学部附属時代の2014年度からの推移を含めて検討すると、上記の結論に達する。

研究活動の状況は、本センター専任教員の論文・著書数、学会発表数、科学研究費採択件数・外部資金獲得額などの項目で、以前に比べて2016・2017年度の数値が向上している点が見られる（資料番号B3-1～3-2）。2014年度の科学研究費補助金が突出しているのは、基盤研究（A）が採択されていたため、採択件数自体はその後増加の一途をたどっている。とくに、2017年度の学内共同教育研究施設への改組後、以上の数値が飛躍的に向上している点の特筆される。

今後も、本センターではこの高い質の維持を目指していく。

（2）分析項目Ⅱ 研究成果の状況

重要な質の変化あり。大きく改善、向上している。

本センターの研究成果を、過去5年間にあたる文学部附属時代の2013年度からの推移を含めて検討すると、上記の結論に達する。

研究成果の状況では、学内共同教育研究施設となった2017年度以降、本センタースタッフのSSおよびSの研究業績数が、以前に比べて大きく向上している点が見られる。なお、2017年度には、本センター初の研究紀要『永青文庫研究』も創刊された。この点も研究活動の明らかな発展を示すものと言える。

Ⅲ 社会貢献の領域に関する自己評価書

1. 社会貢献の目的と特徴

(目的)

第3期中期目標には「貴重な歴史資料を有する文学部附属永青文庫研究センターを中核的な社会連携・社会貢献拠点とする」と定められている。

熊本城をはじめとする熊本地震被災文化財の復旧・保全に必要な歴史情報の提供、文化財復旧・保全事業への市民レベルでの理解促進への貢献、自治体や地元企業と連携した展覧会・セミナー等による研究成果の地域社会への還元等は、地域社会・諸団体が本センターに強く期待するところであり、これに機動的・継続的に応えていくことが喫緊の課題・目的となっている。

(特徴)

本センターの社会貢献の特徴は、資料Ⅲ-1-Aに示すとおり、全国的にみても質量ともに最高のレベルにある永青文庫細川家資料をはじめとする熊本藩関係資料群を対象とした研究を推進し、その成果を文化行政機関等との連携によって地域文化振興にスピーディーに提供することをもって、熊本大学の社会貢献活動の発展充実に寄与するところにある。

資料Ⅲ-1-A 永青文庫研究センター規則

第2条 センターは、永青文庫資料をはじめとする熊本藩関係資料(以下「永青文庫資料等」という。)の総合的な研究を通じて当該資料に立脚した拠点的研究を組織するとともに、文化行政機関等との連携によって地域文化振興に貢献し、もって熊本大学の教育、研究及び社会貢献活動の充実発展に寄与することを目的とする。

(業務)

第3条 センターは、次に掲げる業務を行う。

- (1) 永青文庫資料等の総合的研究に関すること。
- (2) 永青文庫資料等による地域文化の研究に関すること。
- (3) 永青文庫資料等による文化創造事業の実施に関すること。
- (4) 永青文庫資料等の研究に係る文化行政機関等との連携及び支援に関すること。
- (5) 日本史の研究拠点形成及び研究の国際化に関すること。
- (6) その他センターの目的を達成するために必要な事項

[想定する関係者とその期待]

連携対象として具体的に想定している機関は、下記の資料Ⅲ-1-Bに示すとおりである。各博物館・美術館、それに国、県、市町村等の文化財行政担当課や生涯学習事業担当課、は事業・政策立案のために熊本藩関係資料の専門的な分析に基づいた協力を求めている。また広く市民は、展覧会、講演会、シンポジウム、放送番組など、多くの学びの機会を期待している。

資料Ⅲ-1-B 永青文庫研究センターHP

1. 熊本県立美術館、くまもと文学・歴史館、八代市立博物館、肥後の里山ギャラリー等と連携した展覧会、セミナー等による研究成果の社会還元
2. 被災文化財の復旧事業への史料情報提供を通じた協力
3. 熊本大学附属図書館と連携した貴重資料展、セミナー等による研究成果の社会還元
4. 各種講演会・シンポジウムの開催による研究成果の社会還元マスコミを活用した研究成果の普及

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

以下の点は優れた取り組みとして極めて高く評価できる。

- (1) 熊本県立美術館や肥後の里山ギャラリーをはじめとする連携機関や、公益財団法人永青文庫とともに展覧会や講演会を着実に開催し、高く評価されている点。
- (2) 研究成果を NHK や日本テレビなど大手メディアに積極的に提供することをつうじて、ひろく社会に発信・還元し続けている点。
- (3) 研究成果を一般向けの新書等として出版し、成果を社会に還元している点。
- (4) 展覧会・講演・連載等の実施数が、平成 29 年度には同 25 年度比で 3 倍以上に増加している点。

【改善を要する点】

特になし。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 大学の目的に照らして、社会貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

観点 社会貢献活動の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が適切に公表・周知されているか。

(観点到に係る状況)

本センターの社会貢献活動にかかる年次計画は、関係機関の長や有識者らによって構成される「永青文庫常設展示振興基金活用委員会」の審議に付され、目的達成のために適切な計画かどうか検討された上で周知・実施され、次年度の同委員会に実施報告されている(資料 C1-1-1)。これら事業の目的と計画は本センターHP で公表・周知されるとともに、当該事業の連携機関から多様な手段で広報されている。

資料 C1-1-1 平成 29 年度「永青文庫常設展示振興基金活用委員会」資料

<p style="text-align: center;">平成 29 年度「永青文庫常設展示振興基金活用委員会」</p> <p>1 日 時 平成 29 年 8 月 3 日 (木) 午前 9 時 30 分～</p> <p>2 場 所 県庁行政棟本館 5 階 審議会室</p> <p>3 次 第 (1) 開 会 (2) 教育委員会挨拶 (3) 委員挨拶 (4) 議題 ①平成 28 年度事業報告並びに平成 29 年事業計画について (県立美術館・永青文庫研究センター) ②基金活用状況並びに今後の計画について (事務局) ③その他 (5) 閉 会</p> <p style="text-align: center;">-1-</p>	<p style="text-align: right;">(別紙 1)</p> <p style="text-align: center;">永青文庫常設展示振興基金活用委員会名簿</p> <p>1 平成 29 年度委員名簿</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>氏 名</th> <th>備 考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>委員長</td> <td>永青文庫理事 県文化協会会長</td> </tr> <tr> <td>委員</td> <td>学識経験者 元熊本大学文学部教授</td> </tr> <tr> <td>委員</td> <td>学識経験者 元熊本大学文学部教授 熊本城保存活用委員会委員</td> </tr> <tr> <td>委員</td> <td>熊本大学文学部長</td> </tr> <tr> <td>委員</td> <td>熊本大学永青文庫 研究センター長</td> </tr> <tr> <td>委員</td> <td>教育庁教育総務局長</td> </tr> <tr> <td>委員</td> <td>熊本県立美術館長</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center;">(敬称略)</p> <p>2 事務局名簿 (参考)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>役 職</th> <th>氏 名</th> <th>備 考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>事務局長</td> <td></td> <td>文化課長</td> </tr> <tr> <td>事務局</td> <td></td> <td>審議員兼課長補佐</td> </tr> <tr> <td>事務局</td> <td></td> <td>主幹兼総務・文化係長</td> </tr> <tr> <td>事務局</td> <td></td> <td>指導主事 (文化財 (美術工芸) 副査)</td> </tr> <tr> <td>事務局</td> <td></td> <td>参事 (予算担当)</td> </tr> <tr> <td>事務局</td> <td></td> <td>文化財保護主事 (文化財 (美術工芸) 主査)</td> </tr> </tbody> </table> <p>3 任期 平成 27 年 4 月 1 日から平成 30 年 3 月 31 日まで</p> <p style="text-align: center;">-2-</p>	氏 名	備 考	委員長	永青文庫理事 県文化協会会長	委員	学識経験者 元熊本大学文学部教授	委員	学識経験者 元熊本大学文学部教授 熊本城保存活用委員会委員	委員	熊本大学文学部長	委員	熊本大学永青文庫 研究センター長	委員	教育庁教育総務局長	委員	熊本県立美術館長	役 職	氏 名	備 考	事務局長		文化課長	事務局		審議員兼課長補佐	事務局		主幹兼総務・文化係長	事務局		指導主事 (文化財 (美術工芸) 副査)	事務局		参事 (予算担当)	事務局		文化財保護主事 (文化財 (美術工芸) 主査)
氏 名	備 考																																					
委員長	永青文庫理事 県文化協会会長																																					
委員	学識経験者 元熊本大学文学部教授																																					
委員	学識経験者 元熊本大学文学部教授 熊本城保存活用委員会委員																																					
委員	熊本大学文学部長																																					
委員	熊本大学永青文庫 研究センター長																																					
委員	教育庁教育総務局長																																					
委員	熊本県立美術館長																																					
役 職	氏 名	備 考																																				
事務局長		文化課長																																				
事務局		審議員兼課長補佐																																				
事務局		主幹兼総務・文化係長																																				
事務局		指導主事 (文化財 (美術工芸) 副査)																																				
事務局		参事 (予算担当)																																				
事務局		文化財保護主事 (文化財 (美術工芸) 主査)																																				

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

長年文化振興に携わる有識者や連携機関の長によって構成される外部委員会によって本センターの社会貢献事業が具体的にチェックされることで、目的に見合った事業の質が客観的に担保され、それが極めて積極的に広報されている。

観点 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。

(観点に係る状況)

過去5年間で、8回の展覧会を連携機関と共催し、6回の講演会・シンポジウムを開催し、また専任教員らが62回の講演等を実施している(資料C1-2-1)。いずれの事業も円滑かつ適切に実施されている。また本センター研究員が一般読書人に向けて刊行した新書も高い評価を受け平成27年2月の日本テレビの番組視聴率も高く(資料C1-2-2)、その後多くのメディアに本センターの研究成果や社会貢献事業の内容が報じられるようになった(同前)。

資料 C1-2-1 講演会・シンポジウム等

【第9号 平成29年度】

1、センター開催の展覧会・講演会、メディアへの協力等

- (1) 永青文庫研究センター学内共同教育研究施設化記念講演会(2017年5月13日 熊本大学工学部百周年記念館)
- (2) 第33回 熊本大学附属図書館貴重資料展「近世熊本城の被災と修復」(2017年11月3日～11月5日、熊本大学附属図書館と共催)の開催
- (3) 第11回 永青文庫セミナー 稲葉継陽「細川忠利の領国支配と熊本城」(2017年11月3日、熊本大学附属図書館と共催)
- (4) 熊本県立美術館「特集 震災と復興のメモリー@熊本」(2017年4月14日～5月21日)の開催
- (5) 永青文庫平成29年度 冬季展「細川家と『天下泰平』」(2017年12月8日～2018年1月28日)の開催
- (6) 後藤典子『熊本城の被災修復と細川忠利』(熊日新書)の刊行
- (7) メディアへの協力
「NHKスペシャル 熊本城再建“サムライの英知”を未来へ」「土曜ニュースファイル CUBE」などへの取材協力、いくつかの番組が放送された。

2、センター教員の社会貢献活動

(1) 稲葉継陽

▼自治体・団体の委員会

人吉城跡調査検討委員、佐敷城跡調査検討委員(芦北町)、宇土城跡調査検討委員、菊之城史跡調査検討委員(菊池市)、棚底城跡活用計画策定委員(天草市)、上天草市史編纂委員、公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金理事、熊本県文化財保護審議委員、平成29年被災文化財等復旧復興基金配分委員(熊本県)

▼講演

- ①「震災が近世熊本に与えた社会的影響について一熊本城の被災と「肥後迷惑」を素材に一」「震災と復興の歴史を振り返る@熊本」熊本県立美術館展覧会シンポジウム、2017年4月29日、熊本県立美術館本館講堂
- ②「永青文庫研究センター 成果と課題」永青文庫研究センター学内共同教育研究施設化記念講演会、2017年5月13日、熊本大学工学部百周年記念館

- ③「古文書講座 13 熊本における歴史資料の伝来と社会」肥後の里山ギャラリー 平成 29 年度古文書講座、2017 年 6 月 3 日、肥後の里山ギャラリー
- ④「近世熊本の被災と復興—震災、台風災害、津波被害—」西原校区女性の会 50 周年記念式典、2017 年 6 月 15 日、西原コミュニティーセンター
- ⑤「近世熊本の被災と復興—熊本城と地域社会—」NHK カルチャー講座、2017 年 6 月 18 日、鶴屋百貨店ウィング館 6 階
- ⑥「古文書講座 14 熊本城下町の形成と戦国社会」肥後の里山ギャラリー 平成 29 年度古文書講座、2017 年 7 月 29 日、肥後の里山ギャラリー
- ⑦「震災が近世熊本に与えた影響について—熊本城と地域社会—」くまもとさわやか大学校八代校講座、2017 年 8 月 1 日、八代ハーモニーホール
- ⑧「震災が近世熊本に与えた影響について—熊本城と地域社会—」くまもとさわやか大学校熊本校講座、2017 年 8 月 3 日、熊本県総合福祉センター
- ⑨「近世における歴史資料の伝来と社会」第 212 回市民文化講座・島原図書館郷土史を学ぼう会、2017 年 8 月 26 日、森岳公民館大ホール
- ⑩「戦国期八代地域における戦争と平和」熊杏会八代支部総会 特別講演、2017 年 8 月 30 日、セレクトロイヤル八代
- ⑪「歴史から見る熊本の災害」熊本市そなえる防災講座、2017 年 10 月 25 日、熊本県民交流館パレア
- ⑫「細川三代と天下人たち—古文書からしか聞こえない声がある—」第 12 回ホームカミングデー講演会、2017 年 11 月 5 日、熊本大学工学部 2 号館
- ⑬「江戸時代熊本の災害と保田窪鉄砲衆」西原一町内文化祭、2017 年 11 月 26 日、西原一町内公民館
- ⑭「古文書講座 15 近世初期の震災と熊本城」肥後の里山ギャラリー 平成 29 年度古文書講座、2017 年 12 月 2 日、肥後の里山ギャラリー
- ⑮「古文書講座 16 近世熊本の被災と復興」肥後の里山ギャラリー 平成 29 年度古文書講座、2017 年 12 月 9 日、肥後の里山ギャラリー
- ⑯「「天下泰平」の確立と細川家」永青文庫平成 29 年度冬季展記念講演会、2017 年 12 月 10 日、肥後細川庭園松聲閣
- ⑰「近世初期の震災と熊本城」くまもとさわやか大学校 大学院講座、2018 年 2 月 9 日、熊本県総合福祉センター
- ⑱「近世初期の百姓と統治権力—島原一揆後の地域復興をめぐる—」南島原市・西南学院大学博物館連携特別展講演会、2018 年 2 月 17 日、口之津公民館
- ▼シンポジウム パネリスト
- ①「震災と復興の歴史を振り返る@熊本」熊本県立美術館展覧会シンポジウム、2017 年 4 月 29 日、熊本県立美術館本館講堂
- ②「大規模災害時における博物館の役割」パレアアクシア企画展 関連シンポジウム、2017 年 7 月 5 日、熊本県民交流館パレア
- ▼雑誌連載
- ①「永青文庫 歴史万華鏡」(24)~(35)『阿蘇』1020~1031 号、2017 年 4 月~2018 年 3 月
- ②「細川家文書の世界」第 10・11 回 『季刊永青文庫』No.98・99、2017 年 6 月・9 月
- ▼新聞連載・寄稿
- ①「くまにち論壇 380 年前の熊本城主からの警告」『熊本日日新聞』2017 年 4 月 30 日朝刊
- ②「くまにち論壇 公論尊重と私欲否定の原則」『熊本日日新聞』2017 年 7 月 30 日朝刊
- ③「くまにち論壇 人吉城で考える文化財保護」『熊本日日新聞』2017 年 10 月 29 日朝刊

④「くまにち論壇 阿蘇神社「天保の大造営」と今」『熊本日日新聞』2017年12月31日朝刊

(2) 今村直樹

▼自治体・団体の委員会

熊本県議会史編纂委員、宇土市高月邸保存活用検討会委員、愛知県史編さん委員会調査執筆協力員、豊田市史編さん委員会調査執筆協力員、伊豆の国市史跡等整備調査委員会委員

▼講演

- ①「江戸時代の『地方自治』と明治維新一熊本藩から」熊本大学同友会例会、2017年4月、メルパルク熊本
 - ②「永青文庫藩政史料の魅力」永青文庫研究センター学内共同教育研究施設化記念講演会、2017年5月、熊本大学工学部百周年記念館
 - ③「熊本被災史料レスキューネットワークの活動と課題」全国歴史民俗系博物館協議会第6回年次集会、2017年7月、九州国立博物館
 - ④「永青文庫細川家文書にみる日本近代の胎動」熊本大学工学部工業化学科同窓会、2017年10月、熊本大学附属図書館
 - ⑤「永青文庫研究・熊本被災史料レスキュー活動と歴史教育」第14回静岡歴史教育研究会、2017年12月、静岡大学人文社会科学部
- 録「伊豆地域の近代化と旧葦山代官所」明治維新150周年記念「富士・沼津・三島の幕末・明治」講演会、2018年1月、三島市民生涯学習センター

【第8号 平成28年度】

1 センター開催の展覧会・講演会、メディアへの協力等

- (1) 第32回 熊本大学附属図書館貴重資料展「熊本藩法と犯罪史―裁く人と裁かれる人たち」(2016年11月4日～6日、熊本大学附属図書館と共催)の開催
- (2) 第11回 永青文庫セミナー 安高啓明「熊本藩刑法の特徴と犯罪の実態―天領との比較を通じて」(2015年11月1日、熊本大学附属図書館と共催)
- (3) 永青文庫 平成29年 春季展「熊本城 加藤清正と細川家」(2017年3月18～6月4日)への協力
- (4) メディアへの協力
NHKテレビ「東北発 未来塾」「ファミリーヒストリー」などへの取材協力

2、センター教員の社会貢献活動

稲葉継陽

▼自治体・団体の委員会

人吉城跡調査検討委員、佐敷城跡調査検討委員(熊本県芦北町)、宇土城跡調査検討委員、菊之城史跡調査検討委員(同菊池市)、棚底城跡活用計画策定委員(同天草市)、上天草市史編纂委員、公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金理事、熊本県文化財保護審議委員、平成28年被災文化財等復旧復興基金配分委員会(熊本県)

▼講演

- ①「古文書講座7 織田信長研究の最前線―信長の「天下」をめぐる―」肥後の里山ギャラリー 2016年度 古文書講座、2016年6月11日
- ②「古文書講座8 豊臣秀吉の「天下」と細川幽齋」肥後の里山ギャラリー 2016年度 古文書講座、2016年6月18日
- ③「歴史資料を未来につなぐということ―大名家文書と在地文書、熊本震災の経験から―」独立行政法人国立文化財機構「文化財防災ネットワーク推進事業」特別講演会、2016年7月18日、九州国立博物館
- ④「織田信長研究の最前線―信長の「天下」をめぐる―」くまもとさわやか大学校 八代校講座、2016年8月9日、八代ハーモニーホール

- ⑤「織田信長研究の最前線—信長の「天下」をめぐる—」くまもとさわやか大学校 熊本
本校講座、2016年8月25日、熊本県総合福祉センター
- ⑥「古文書講座9 九州の戦国動乱と領土問題—地域の平和から「天下泰平」へ—」肥後
の里山ギャラリー 2016年度古文書講座、2016年8月27日
- ⑦「細川家の豊前・豊後支配と地域社会」大分県立先哲史料館夏季企画展記念講演会、
2016年9月10日、大分県立図書館視聴覚ホール
- ⑧「近世熊本の被災と復興—震災、台風災害、津波被害—」清香会特別講座、2016年9
月17日、熊本第一高等学校 清香館
- ⑨「熊本県立美術館のこれまでとこれからを語ろう！」(パネルディスカッション) 熊本
県立美術館40周年記念シンポジウム、2016年10月1日、熊本県立美術館本館講堂
- ⑩「熊本城の震災の歴史—「今から」を歴史にするために過去に学ぶ」熊本大学×東北
大学 市民公開講座、2016年10月8日、熊本大学薬学部
- ⑪「永青文庫細川家資料に見る戦国武将の実像」第64回六大学教養教育代表者(教育・
事務)会議、2016年10月14日、熊本大学くすのき会館
- ⑫「パネルディスカッション 熊本地震 被災文化財の復旧に向けて～美しい熊本の宝を
次世代に伝えるために～」熊本県文化財保護大会(第6回文化財研修会)、2016年11
月18日、熊本県庁地下大会議室
- ⑬「細川家の古文書に見る保田窪」第7回 西原1町内文化祭、2016年11月27日、西
原1町内公民館
- ⑭「熊本被災史料レスキューネットワークの取り組み」独立行政法人国立文化財機構「文
化財防災ネットワーク推進事業」公開シンポジウム、2016年12月4日、九州国立
博物館
- ⑮「古文書講座10 戦国期熊本地域の民衆世界—「天下泰平」を支えた力—」肥後の里
山ギャラリー 2016年度古文書講座、2016年12月17日
- ⑯「島原・天草一揆と「天下泰平」」南島原市×西南学院大学博物館連携特別展関連公開
講演会、2017年2月18日、原城図書館
- ⑰「戦場は関ヶ原のみならず—慶長5年内戦の実態にせまる—」壬生町歴史民俗資料
館企画展シンポジウム、2017年2月25日、城址公園ホール(栃木県下都賀郡壬生町)
- ▼雑誌連載
- ①「永青文庫 歴史万華鏡」(12)～(23)『阿蘇』1008～1019号、2016年4月～2017年3
月
- ②「細川家文書の世界」第6～9回 『季刊永青文庫』No.94～97、2016年4月～2017年
3月
- ③「熊本地震と文化財の保全・復旧」『kumamoto 地方経済情報』52、2016年7月
- ④「織田信長研究の最前線—信長の「天下」をめぐる—」『kumamoto 地方経済情報』
53、2016年8月
- ⑤「戦国動乱から「天下泰平」へ—戦場の逸脱暴力と平和創出—」『kumamoto 地方経済
情報』57、2016年12月
- ⑥「「天下泰平」の江戸時代—秀吉の政策と長期平和—」『kumamoto 地方経済情報』60、
2017年3月
- ▼新聞連載・寄稿
- ①「くまにち論壇 日本史に見る立憲主義の伝統」『熊本日日新聞』2016年5月29日朝
刊
- ②「くまにち論壇 被災した民間の古文書を救え」『熊本日日新聞』2016年7月31日朝
刊
- ③「くまにち論壇 熊本城二の丸の活用法に疑問」『熊本日日新聞』2016年10月30日
朝刊
- ④「くまにち論壇 天守閣の復旧 拙速避けたい」『熊本日日新聞』2017年1月29日朝刊

⑤「天守閣 木造復元できないか」『熊本日日新聞』2017年3月1日朝刊

【第7号 平成27年度】

1、センター開催の展覧会・講演会活動

- (1) 第31回 熊本大学附属図書館貴重資料展「細川家臣・道家家の幕藩初期と明治維新」(2015年11月1日～3日、熊本大学附属図書館と共催)の開催
- (2) 第10回 永青文庫セミナー「道家家三代と天草・島原一揆」(稲葉)、「<肥後の維新>の支柱となった道家之山」(三澤)の開催(2015年11月1日、熊本大学附属図書館と共催)
- (3) 展覧会「誓いを立てる武士たち 細川家血判起請文の世界」の開催(2015年3月21日～6月28日、永青文庫と共催、永青文庫)
- (4) 熊本大学知のフロンティア講座「織田信長研究の最前線—信長の「天下」をめぐる—」(講演：稲葉、2015年10月4日、熊本大学政策創造研究教育センターと共催)
- (5) メディアへの協力
NHKテレビなどの番組制作に協力し、「ブラタモリ」「知恵泉」などが放送された。

2、センター教員の社会貢献活動

稲葉継陽

▼自治体・団体の委員会

人吉城跡調査検討委員、佐敷城跡調査検討委員(芦北町)、宇土城跡調査検討委員、熊本市文化財保護委員、菊之城史跡調査検討委員(菊池市)、上天草市史編纂委員、公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金理事

▼講演

- ①「細川幽斎と天下統一」表千家熊本青年部総会 講演会、2015年4月29日、くまもと県民交流会館パレア
- ②「ポスト戦国時代 細川忠利の国づくり 1」肥後の里山ギャラリー 2015年度 古文書講座、2015年7月4日
- ③「ポスト戦国時代 細川忠利の国づくり 2」肥後の里山ギャラリー 2015年度 古文書講座、2015年8月29日
- ④「中世地域史研究の方法—16世紀西原村の石造物史料を例に—」熊本県文化財保護協会 第3回文化財研修会、2015年9月16日
- ⑤「織田信長研究の最前線—信長の「天下」をめぐる—」熊本大学 知のフロンティア講座、2015年10月4日、熊本大学工学部百周年記念館
- ⑥「熊本の歴史と永青文庫細川家資料」第52回 九州地区国立学校会計事務研修、2015年10月19日、熊本大学全学教養棟
- ⑦「永青文庫細川家資料で見直す「江戸時代」」熊日まだまだ学ぶ教養講座、2015年11月25日、ビブレス熊日会館
- ⑧「ポスト戦国時代 細川忠利の国づくり 3」肥後の里山ギャラリー 2015年度 古文書講座、2015年12月5日
- ⑨「ポスト戦国時代 細川忠利の国づくり 4」肥後の里山ギャラリー 2015年度 古文書講座、2015年12月12日

▼雑誌連載

「永青文庫 歴史万華鏡」(1)～(11) 『阿蘇』997～1007号、2015年5月～2016年3月

▼新聞記事

「戦後70年を考える 武器使用避けた自己抑制力 江戸時代の天下泰平に学ぶ」『熊本日日新聞』2015年8月21日 朝刊

【第6号 平成26年度】

1、センター開催の展覧会・講演会活動など

- (1) 細川コレクション「信長からの手紙」の開催(2014年10月10日～11月14日、

永青文庫・熊本県立美術館との共催、熊本県立美術館)

- (2) 第 30 回 熊本大学附属図書館貴重資料展「誓いを立てる武士たち 細川家血判起請文の世界」(2014 年 11 月 1 日～3 日、熊本大学附属図書館と共催)
- (3) 第 9 回永青文庫セミナー 稲葉継陽「近世初期細川家 血判起請文の世界」(2014 年 11 月 1 日、熊本大学附属図書館と共催)
- (4) テレビ番組放送
「くりいむしちゅーの歴史新発見 信長 59 通の手紙を解説せよ」の日本テレビ系での放送 (2015 年 2 月 12 日 19:00～20:54) …制作に全面協力
- (5) 織田信長関係新史料の発見と記者会見 (2014 年 10 月 3 日)

2、センター教員の社会貢献活動

稲葉継陽

▼自治体・団体の委員会

人吉城跡調査検討委員、佐敷城跡調査検討委員、陣の内館跡調査検討委員、宇土城跡調査検討委員、熊本市文化財保護委員、上天草市史編纂委員、肥後銀行本店ギャラリー準備委員

▼講演

- ①「日本史研究の最前線—永青文庫細川家史料群から—」第 53 回 全国自治体病院協議会九州地方会議 特別講演、KKRホテル熊本、2014 年 7 月 11 日
- ②「永青文庫細川家資料の世界とその可能性」図書館文化史研究会大会講演、2014 年 9 月 6 日、熊本学園大学
- ③「細川家伝来の織田信長文書と戦国社会」熊本県立美術館「信長からの手紙」展 講演、2014 年 10 月 18 日、熊本県立美術館
- ④「近世初期細川家 血判起請文の世界」第 9 回永青文庫セミナー講演、2014 年 11 月 1 日、熊本大学附属図書館
- ⑤「永青文庫細川家資料の世界とその可能性」第 4 回熊本大学関西連合同窓会 特別講演、2014 年 11 月 29 日、大阪太閤園
- ⑥「熊本城惣構と高麗門—濫妨狼藉と城の機能—」熊本地名研究会例会、2014 年 12 月 14 日、熊本市中央公民館
- ⑦「細川家伝来の織田信長文書と戦国社会」永青文庫冬季展「重要文化財指定記念 信長からの手紙」展特別講演会、2015 年 1 月 24 日、東京・永青文庫
- ⑧「細川家伝来の織田信長文書の魅力」歴史文化倶楽部講演、2015 年 2 月 7 日 熊本県伝統工芸館

▼新聞寄稿

- ①「信長文書のここが面白い」『熊本日日新聞』2014 年 11 月 10 日 朝刊
- ②「想像力のスイッチ オンに」『熊本日日新聞』2014 年 12 月 13 日 朝刊

【第 5 号 平成 25 年度】

1、センター開催の展覧会・講演会活動など

「シンポジウム 日本近世の領国地域社会」の開催 (2013 年 11 月 30 日・12 月 1 日、熊本大学)

2、センター教員の社会貢献活動

稲葉継陽

▼自治体・団体委員会

人吉城跡調査検討委員、佐敷城跡調査検討委員、陣の内館跡調査検討委員、宇土城跡調査検討委員、高麗門遺跡調査検討委員、熊本市文化財保護委員

▼講演

- ①「濫妨狼藉から天下泰平へ—山鹿城：城の機能と民衆—」2013 年 7 月 3 日 (くまもと県民カレッジ 熊本学 I コース 於県民交流会館パレア)
- ②「細川幽斎と信長・家康・秀吉」2013 年 9 月 14 日 (舞鶴・丹後学講座講演 於大阪

毎日インテシオ)

- ③「細川忠利の政治と生涯」2013年9月24日（歴史サロン花畑 くまもとの歴史を彩った人々 於熊本市歴史文書資料室）
- ④「近世史研究の最前線—永青文庫細川家史料から—」2013年10月18日（歴史研究会 第29回全国大会 於熊本交通センターホテル）
- ⑤「日本史研究の最前線—永青文庫細川家史料から—」2013年10月19日（日本青年会議所 建設部会第47回全国部会員大会 於熊本城数寄屋丸）
- ⑥「16世紀の社会変動と豊臣政権」2013年10月27日（八代市立博物館 平成25年度秋季特別展覧会「秀吉が八代にやって来た」特別講演会）
- ⑦「丹後の戦国時代と一色氏・明智氏・細川氏」2013年11月16日（細川忠興公・ガラシヤ夫人誕生450年記念展示「丹後、細川家の事績」文化財講座 於京都府立丹後郷土資料館）
- ⑧「中世史を起点に農村社会を考える」2013年12月17日（東京大学農業経済学研究室オープンセミナー 於東京大学農学部農経会議室）

▼新聞連載

「ポスト戦国世代 細川忠利の国づくり」『熊本日日新聞』2013年6月7日～8月16日 計10回

資料 C1-2-2 メディアでの紹介

本センターの研究活動をドラマ化し研究成果をフューチャーした日本テレビ系特番「くりいむしちゅーの歴史新発見 信長59通の手紙を解説せよ」（2015年2月12日19:00～20:54）の地域別視聴率（日本テレビ提供）

NTV（関東）	12.8%	YTV（関西）	12.3%	CTV（中京）	12.6%
STV（札幌）	7.8%	MMT（仙台）	9.7%	FCT（福島）	9.6%
TeNY（新潟）	8.6%	SDT（静岡）	13.0%	RNC（岡・香）	10.7%
HTV（広島）	11.3%	FBS（九州）	7.7%	KKT（熊本）	19.2%

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）

研究成果に基づいた多様な社会貢献活動を切れ目なく実施してきており、それに対する社会からの注目度も高い。外部委員会にて承認された事業は、すべて適切に実施されている。本センターの活動は、質量ともに本学の社会貢献・社会連携の重点領域にふさわしいレベルにある

観点 活動の実績及び活動への参加者等の満足度等から判断して活動の成果が上がっているか。

（観点に係る状況）

熊本県立美術館や公益財団法人永青文庫と共催した展覧会はいずれも好評であったが、「細川家と「天下泰平」展（東京開催）の場合、2,658人の来館者を得、アンケートの大半が、熊本大学での史料研究の成果が反映されたこの展覧会に満足したとの感想を記したものであった（資料 C1-3-1）。同様の評価は熊本県立美術館との共催展覧会や本学附属図書館と共催している貴重資料展にも共通する。また、17世紀初期の細川藩における葡萄酒製造に関する研究成果の発信など、全国紙を通じて社会的関心を強く喚起する実績もあげている。

資料 C1-3-1 「細川家と「天下泰平」一関ヶ原からの40年」終了報告

■入館者数

総入館者数：2658人（12/9～1/28、34日間）

1日平均：78.2人

■季刊誌（2000部発行）完売

購入率：12.7%

■メディア露出

【新聞】9紙

- ・東京新聞 木曜朝刊「ほっとなび」
- ・10/18 熊本日日新聞 朝刊（永青文庫研究センター稲葉継陽氏による築山家文書紹介）
- ・11/5 朝日新聞 夕刊 マリオン欄
- ・12/7、1/4 日本経済新聞 夕刊「マンスリーミュージアムガイド」
- ・12/9 熊本日日新聞 朝刊（展覧会紹介）
- ・12/9 熊本日日新聞 朝刊（永青文庫研究センター・稲葉継陽氏による築山家文書紹介）
- ・1/9 定年時代（展覧会紹介）
- ・1/10 読売新聞 朝刊（展覧会紹介、主に築山家文書紹介）
- ・1/23 産経新聞 朝刊 関西版（奈良大学・千田嘉博氏連載記事内での永青文庫資料紹介）

【雑誌】10誌

- ・『刀剣春秋』12月号
- ・『茶の湯』527号
- ・『茶道雑誌』1月号
- ・『月刊 歴史街道』2月号
- ・『小さな蕾』1月号、2月号
- ・『東京人』1月号
- ・『池袋15'』2月号
- ・『和楽』2、3月号 小学館
- ・『博物館研究』No.52、53
- ・『芸新手帳2018』【WEB】

【WEB】3媒体

- ・美術館・博物館情報サイト「アートアジェンダ」
- ・インターネットミュージアム
- ・美術手帖「ART NAVI」

■プレス内覧会

12/8（金）14：00～16：00

参加：4社6名

【内訳】新潮社「芸術新潮」1名、新潮社「工芸青花」1名、岩波書店編集部2名、熊本日日新聞東京支社1名、日本経済新聞社編集局文化部1名

■ギャラリートーク

12/9（土）14：00～

話し手：後藤典子氏（熊本大学永青文庫研究センター特別研究員）

参加者：約30名

■記念講演会

12/10（日）14：00～15：30

講師：稲葉継陽氏（熊本大学永青文庫研究センター長）

演題：「天下泰平」の確立と細川家

場所：肥後細川庭園 松聲閣

参加者：49名

■ 来館者アンケートより

- ・こういった旧家の持ち物を見ることができるのは非常に貴重な体験である。また古文書を理解する熊本大学には頭が下がる。頑張ってください。(50代男性)
- ・富士ゼロックスによる複写技術は大変美しく再現できていることに驚きました。筆の擦れや起請文の墨、血判まで、後世に残すためにも大事なことです。(30代男性)
- ・調度品に趣があってシックな雰囲気があるところが好きです。細川家は戦国時代の手紙など貴重な文書を数多く保管されているので、今後もこのような展示をしてほしいです。印籠などの小物も素敵なのが多くて見ていて楽しいです。(20代女性)
- ・細川家ならではの貴重な古文書を目にすることができて、今までで一番歴史的な資料に触れた感じがした。解説も具体的で説得力があって、天下泰平の理由がわかった。(70代女性)
- ・関ヶ原前後の様子がリアルに伝わってくる資料に感動しました。今回は非常に内容が豊かで、貴重なものを多く見られてよかったです。(60代女性)
- ・興味深い文書が多々ありとても勉強になった。自身は理系選択の高校生ですが、とても良い展示だったと思うので、他の同年代の人たちにも来てもらいたいと思いました。(10代男性)
- ・百聞は一見に如かずとは、貴館の展示品の数々です。狩野の「狩猟図」が大変すばらしい、これを見学に来ました。貴館へは、古代中国の展示に続き2度目です。(40代男性)
- ・内容の豊かな古文書をゆっくり見ることができてよかったです。解説もわかりやすかったです。(30代男性)
- ・永青文庫には10年以上見学のファンです。従来は建物も古くからのものを手直しして、伝製品を並べましたという感じでした。その後はえらく足が遠のいていましたが、企画展のニュースにまた見学に来るようになりました。広々とした展示室、少人数用だけれど最上階までのエレベーター設置など、今後の企画展が一層の人出を集めることは間違いありません。(80代男性)
- ・以前にもこちらには伺ったことがあったのですが、今回は忠興や忠利によりフォーカスした展覧会ということで、大変楽しみにしていました。細川家の家臣というと、松井や有吉というイメージがとても強いのですが、月山家の新出文書で、細川家家臣が淀の方で活躍していたというのは驚きでした。細川家の情報量の強さをとても感じられました。また、忠利が家督を継ぐ際の家康の文書などあまり詳しく知らなかった部分も知ることができ、より一層細川家の知識が深まる展示でした。(10代女性)
- ・大学で日本史の勉強をしています。血判状、起請文様々な文書を拝見することができ大変勉強になり、かつ良い刺激を受けました。(20代女性)
- ・素晴らしい筆の使い方、その文字に本当に感激いたしました。刀や印籠の絵、鞍の花模様等色使いも気に入りました。細川家の代々の位置、暮らしぶりなどほんの少しですがしることができました。今日は思いもよらぬくらい大きな感動をいただきました。本当にありがとうございました。(80代女性)
- ・1600年代から江戸初期にかけての細川家を概観することができてとても興味深く見学させていただきました。特に忠利の政治思想、民衆の平和観に対する示唆に刺激を受けました。新資料の展示もあり、貴館での研究成果を垣間見することもでき、とても見応えのある展覧会でした。(20代女性)
- ・3階4階に大声でしゃべる高齢者夫婦が複数いて非常に不快、興をそがれて残念であった。展示をじっくり見たかったけれど諦めました。(50代女性)
- ・2階の根付が暗くてよく見えません。(50代女性)
- ・書状については積文を買えると嬉しいので、ただのコピーでもいいので積文の販売を

お考えいただけませんか。
・細川家系図を展示してもらいたい（40代男性）

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）

展覧会・講演会にかかるアンケート結果から、活動への参加者の満足度がかなり高いことは明らかであり、高水準の活動成果が上がっているものと判断される。

観点 改善のための取組が行われているか。

（観点到係る状況）

展覧会・講演・連載等の実施数が、平成29年度には同25年度比で3倍以上に増加している（前掲資料 C1-2-1）。外部委員会「永青文庫常設展示振興基金活用委員会」において連携機関である熊本県立美術館等と協議し、展覧会の共催を追求・実現し、また公益財団法人永青文庫とも頻繁に打ち合わせして展覧会・講演会の開催を企画するなどの、継続的な取組が、実施数の飛躍的な増加につながっている。

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）

展覧会・講演・連載等の実施数の飛躍的な増加と、平成29年度実施の東京での展覧会参加者アンケートの結果からみて、期待を大きく上回る水準の改善がみられることは明らかである。

分析項目Ⅱ 大学の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

観点 大学の地域貢献活動の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が適切に公表・周知されているか。

（観点到係る状況）

本センターの社会貢献活動にかかる年次計画は、関係機関の長や有識者らによって構成される「永青文庫常設展示振興基金活用委員会」の審議に付され、目的達成のために適切な計画かどうか検討された上で周知・実施され、次年度の同委員会に実施報告されている（前掲資料 C1-1-1）。また、これら事業の目的と計画は本センターHPで公表・周知されるとともに、当該事業の連携機関から多様な手段で広報されている。

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）

長年文化振興に携わる有識者や連携機関の長によって構成される外部委員会によって本センターの社会貢献事業が具体的にチェックされることで、目的に見合った事業の質が客観的に担保され、それが極めて積極的に広報されている。

観点 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。

過去5年間で、8回の展覧会を連携機関と共催し、7回の講演会・シンポジウムを開催し、また専任教員らが62回の講演等を実施している（前掲資料 C1-2-1）。いずれの事業も円滑かつ適切に実施されている。また本センター専任教員は平成29年度の時点で自治体・団体の文化財保護等のための委員を14件つとめ、地元紙や地元の経済界及び文化団体が

発行する雑誌への連載に積極的に取り組んでいる。

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

研究成果に基づいた多様な地域貢献活動を切れ目なく実施してきており、それに対する社会からの注目度も高い。外部委員会にて承認された事業は、すべて適切に実施されている。本センターの活動は、質量ともに本学の地域貢献・地域連携の重点領域にふさわしいレベルにある

観点 活動の実績及び活動への参加者等の満足度等から判断して、活動の成果が上がっているか。

(観点に係る状況)

熊本大学附属図書館と共催した貴重資料展と永青文庫セミナーはいずれも好評であったが、「近世熊本城の被災と修復」展の場合、3日間で435人の来場者を得、アンケートの大半が、熊本大学での史料研究の成果が反映されたこの展覧会に満足したとの感想を記したものであった(資料 C2-3-1、C2-3-2)。永青文庫セミナーの講演に対する満足度はさらに高かった。こうした満足度の高さは例年の傾向である。

資料 C2-3-1 永青文庫セミナーアンケート

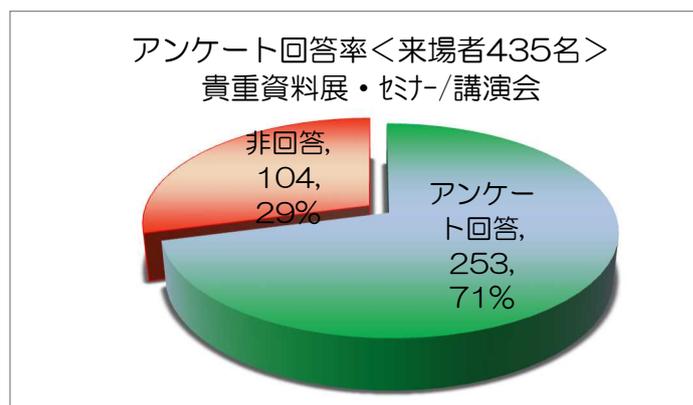
<第33回貴重資料展> 近世熊本城の被災と修復

平成29年11月3日(金)~5日()

<公開講演会/第12回永青文庫セミナー>

演題 「細川忠利の領国支配と熊本城」 / 稲葉 継陽 永青文庫研究センター長/教授
平成29年11月3日(金)

アンケート回答者:286名 (総来場者数:435名 回答率 66%)

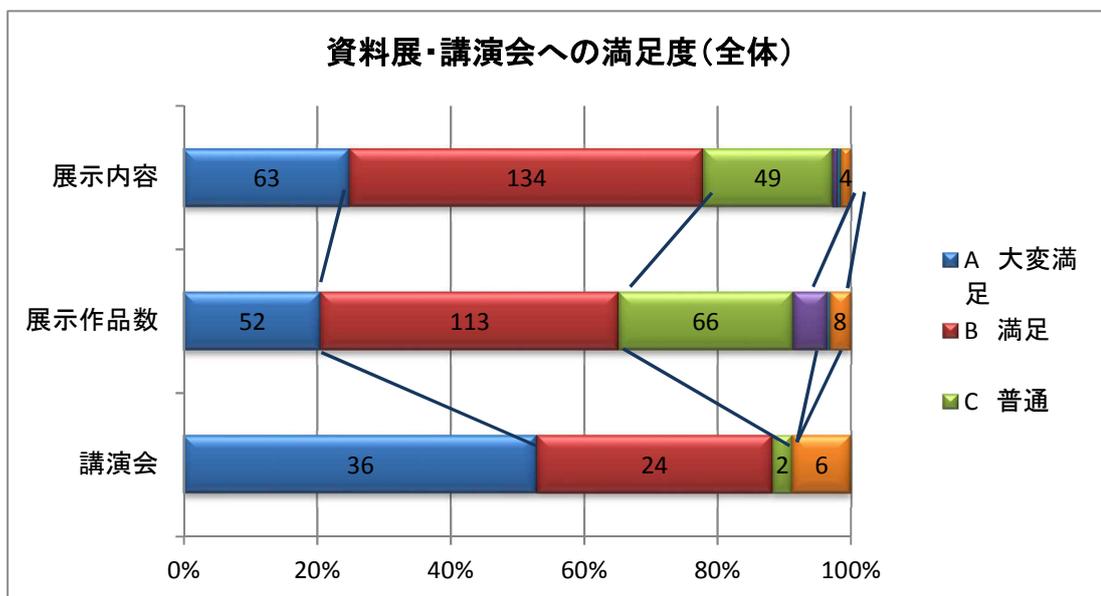


<参考:平成28年度 アンケート回答者:253名 (総来場者数:357名 回答率71%)
平成27年度 アンケート回答者:241名 (総来場者数:352名 回答率68%)>

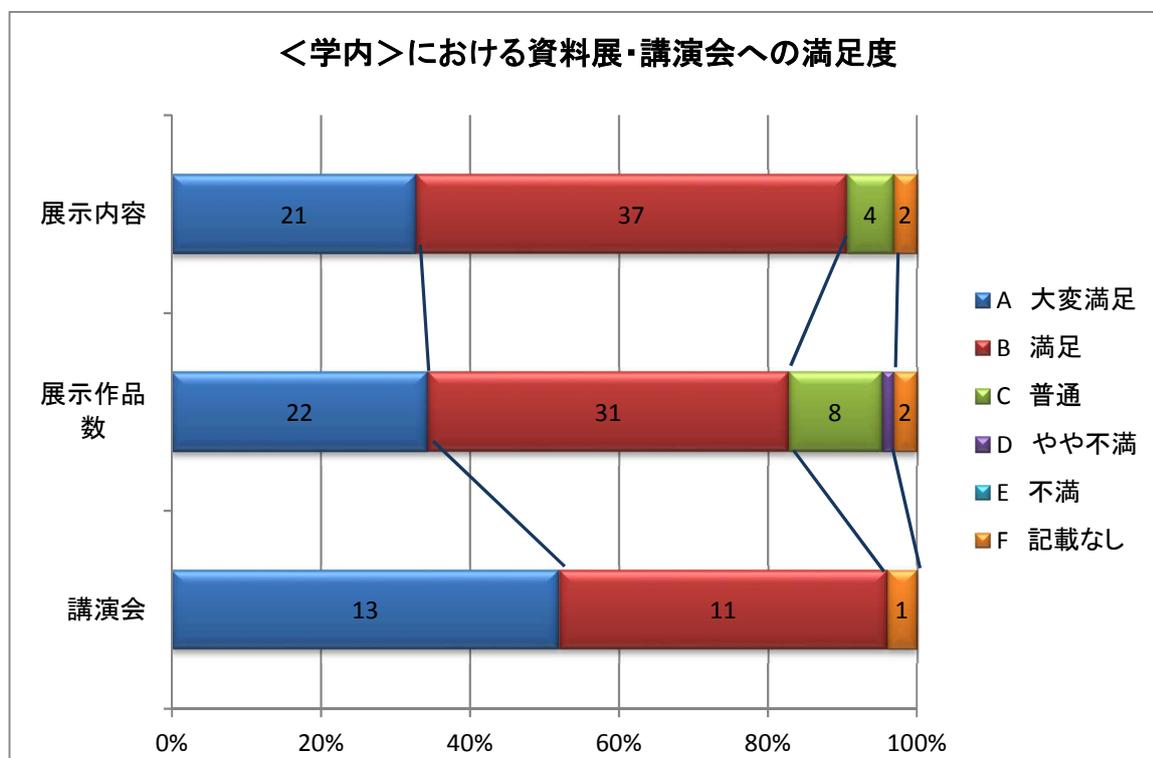
満足度分析

- ・展示内容はいかがでしたか。【貴重資料展】
- ・展示作品数はいかがでしたか。【貴重資料展】
- ・講演内容はいかがでしたか。【公開講演会/永青文庫セミナー】

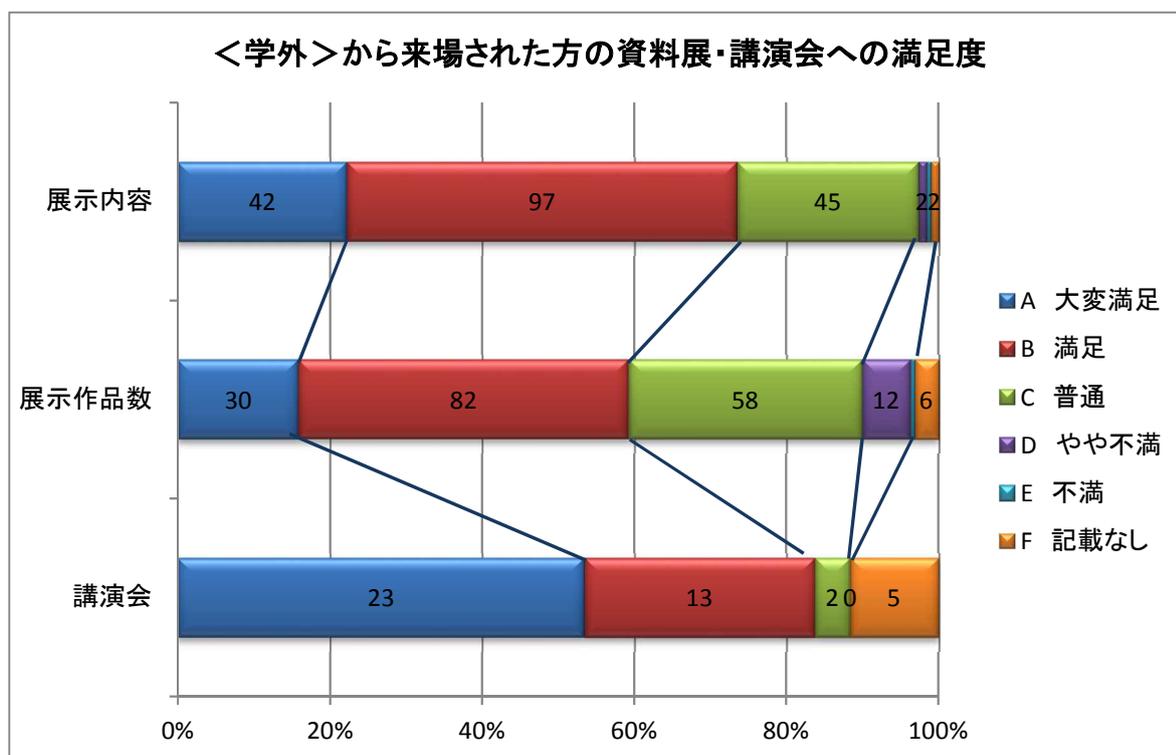
I. 貴重資料展・講演会/永青文庫セミナー全体への満足度



Ⅱ-1. 学内参加者の満足度



Ⅱ-2. 学外参加者の満足度



第33回貴重資料展及び公開講演会/第12回永青文庫セミナー実施報告

◆貴重資料展

テーマ 近世熊本城の被災と修復

期間 平成29年11月3日(金)～11月5日(日) 10:00-17:00 [3日間]

会場 中央館1F 古文書閲覧室/ラーニングcommons

◇公開講演会・第12回永青文庫セミナー

演題 「細川忠利の領国支配と熊本城」

講師 稲葉 継陽 永青文庫研究センター長/教授

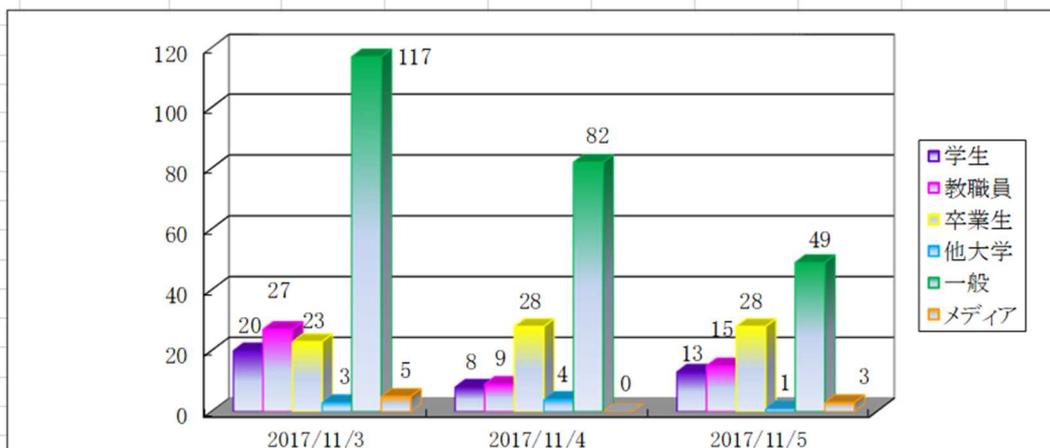
日時 平成29年11月35日(土) 14:00～15:30

場所 中央館1F ラーニングcommons

【実施結果】

◆貴重資料展 来場者 357名

	学生	教職員	卒業生	他大学	一般	メディア	計
11月3日	20	27	23	3	117	5	195
11月4日	8	9	28	4	82	0	131
11月5日	13	15	28	1	49	3	109
計	41	51	79	8	248	8	435



(備考)

*期間中アンケート実施

・紫熊祭(11/3-5)

・公開講演会/第12回永青文庫セミナー開催 11/3

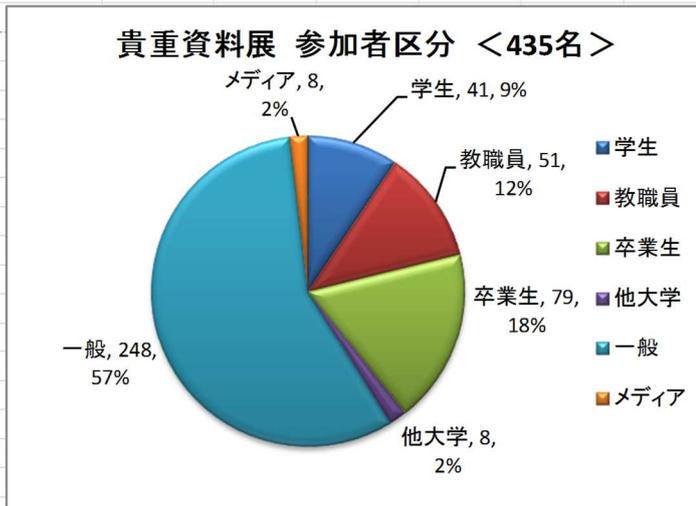
・メディア取材(11/3 熊本日日新聞社、くまもと県民テレビ / 11/5 毎日新聞社)

報道① 11/3 くまもと県民テレビ「テレビタミン」内放送

報道② 11/4 熊本日日新聞 朝刊紙面 14面「熊本藩資料 12点初公開」

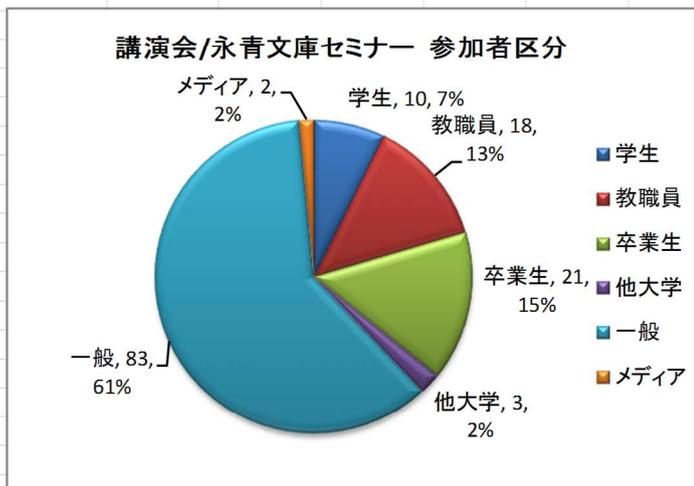
報道③ 11/7 毎日新聞 朝刊紙面 23面「近世熊本城 被災の歴史」

報道④ 11/17 熊本日日新聞 朝刊紙面 21面「熊本城の今 72」

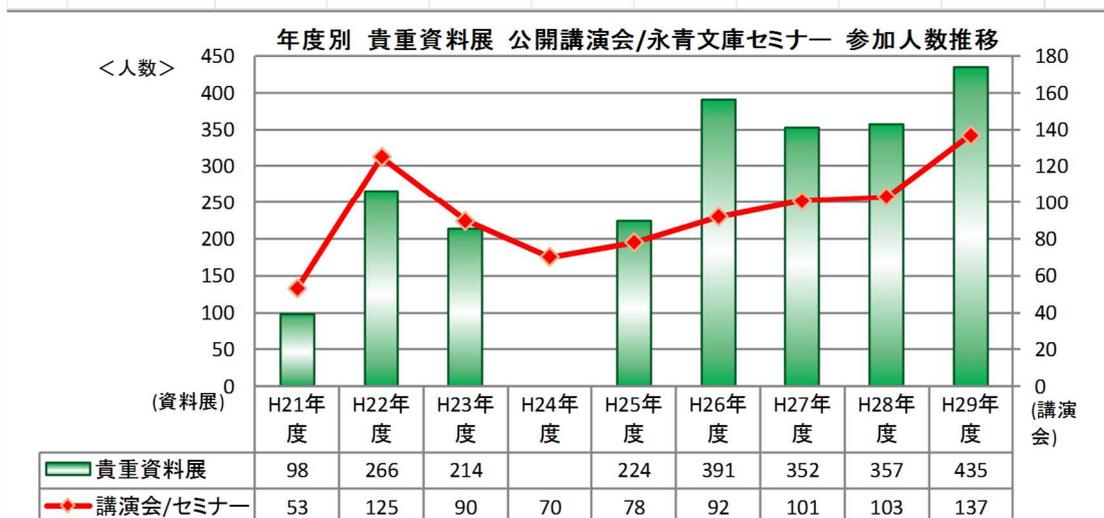


◇講演会 受講者 137名

	学生	教職員	卒業者	他大学	一般	メディア	計
11月3日	10	18	21	3	83	2	137



【年度別参加者推移】



(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

展覧会・講演会にかかるアンケート結果から、活動への参加者の満足度がかなり高いことは明らかであり、高水準の活動成果が上がっているものと判断される。

観点 改善のための取組が行われているか。

展覧会・講演・連載等の実施数が、平成 29 年度には同 25 年度比で 3 倍以上に増加している（前掲資料 C2-1-1）。また外部委員会「永青文庫常設展示振興基金活用委員会」において連携機関である熊本県立美術館等と協議し、展覧会の共催を追求・実現し、また本学附属図書館や連携機関とも展覧会・講演会の開催を企画するなどの継続的な取組が、実施数の飛躍的な増加につながっている。さらに、平成 25 年度以降、貴重資料展及び永青文庫セミナーへの参加者人数は大幅に増加しており、改善への取組が成果をあげている。

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

展覧会・講演・連載等の実施数の飛躍的増加と、平成 29 年度実施の貴重資料展・永青文庫セミナー参加者アンケートの結果、貴重資料展・永青文庫セミナーへの参加者数推移からみて、期待を大きく上回る水準の改善がみられることは明らかである。

4. 質の向上度の分析及び判定

(1) 分析項目Ⅰ 大学の目的に照らして、社会貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

以下の点で重要な質の変化があった。
大きく改善、向上している。

第一に、貢献の量的増大である。本センター開催の社会貢献活動や専任教員の展覧会・講演・連載等の実施数は、平成 25 年度と平成 29 年度を比較すると、3 倍以上に増加している。

第二に、貢献の質的向上である。熊本県立美術館、公益財団法人永青文庫、肥後の里山ギャラリーなどの連携機関と共催・協力した展覧会・講演会を継続的に展開し、平成 29 年度には、ついに本センターの研究成果によって全体を構成した展覧会「細川家と『天下泰平』」を永青文庫（東京）で開催するに至り、好評を博した。本センターとこれら機関との連携は一貫して緊密化しており、博物館等の現場のニーズを共有して継続的に企画立案に参加することで、社会貢献の質を向上させている。

以上から、本センターの社会貢献活動は質量ともに大きく改善、向上していると判定される。

(2) 分析項目Ⅱ 大学の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

以下の点で重要な質の変化があった。
大きく改善、向上している。

第一に、貢献の量的増大である。

本センター開催の社会貢献活動や専任教員の展覧会・講演・連載等の実施数は、平成 25 年度と平成 29 年度を比較すると、3 倍以上に増加しているが、その大半が熊本県内の施設にて実施されていることから、永青文庫資料等の研究成果を地域社会に還元する活動量は、

飛躍的に増大していることは明瞭である。

第二に、貢献の質的向上である。

本センターと本学附属図書館とが毎年共催する貴重資料展・永青文庫セミナーへの参加者数は継続的に増加し、満足度も向上している。また、熊本日日新聞社をはじめとする地元マスコミ、文芸雑誌『阿蘇』等の地元文化メディアへの連載を継続し、展覧会や講演会も含めて、本センターの研究成果がこれら媒体によって地域に報道・発信され、市民とともに、熊本城の復旧など文化財保護行政の現場に提供される仕組みが、ここ数年で確立したといえる。

また、本センター専任教員は平成 29 年度の時点で自治体・団体の文化財保護等のための委員を 14 件つとめている。これら委員会の活動の一環として、平成 29 年度には永青文庫の細川忠興・忠利書状群が熊本県重要文化財への指定が実現した。

このように、本センターの地域貢献の質は一貫して向上している。

以上から、本センターの地域貢献活動は質量ともに大きく改善、向上していると判定される。

IV 国際化の領域に関する自己評価書

1. 国際化の目的と特徴

本学は「国際的な研究拠点を志向する地域起点大学」として、地域社会や国際社会と緊密につながりつつ、高度なレベルで教育・研究・社会貢献に取り組むことを目的に掲げている。その取組を人文社会科学分野から発展させるために、永青文庫研究センター（以下「本センター」と略記）は、本学ならではの特色ある研究・社会貢献重点領域と位置づけられている（永青文庫研究センターHP）。

本センターにおける国際化の主たる目的は、近世日本の大名家資料群のなかで質量ともに最高レベルにある永青文庫資料をはじめとした熊本藩関係資料を対象とした研究を、国際的な事例（ヨーロッパ・中国など）との比較検討を通じて深めること、併せてその成果を国際社会にひろく発信することである。

以上の目的のもと、本センターでは国際研究シンポジウムの開催、国際学会での研究発表、センターHPの英語表記などに精力的に取り組んでいる。また、本学を訪問した外国人研究者が永青文庫資料の閲覧を希望することもあり、その際は本センタースタッフが解説を行っている。訪問した外国人研究者からも好評であった。

〔想定する関係者とその期待〕

想定している関係者は、主に国外の外国人研究者、外国人留学生である。国際研究シンポジウムの開催、国際学会での研究発表、センターHPの多言語表記、日本（史）研究への助言などが期待されている。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

1. 本センターでは、2015年度に大学間国際交流協定を締結した中国の安徽大学（国家教育部人文社会科学重点研究基地）などとの研究交流を、研究活動の柱の一つに位置付けている（本センターHP）。これを着実に推進するために、2016年5月に安徽大学で、学長も同席した国際シンポジウムを開催した。
2. 2017年9月にモスクワで開催された国際歴史会議に、稲葉継陽センター長が報告者として招致された。ロシア科学アカデミーで「Popular Revolts and Violence in 16th Century Japan (at the Age of Civil Wars)」という演題で報告し、国際歴史会議の総会において高い評価を受けた。
3. 2017年度の学内共同教育研究施設への改組に伴い、永青文庫研究センターHPを刷新した際、英語表記も充実させた。また、同年度に刊行した研究紀要『永青文庫研究』にも英文の論文題目を掲載した。

【改善を要する点】

特になし。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 目的に照らして、国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げていること。

観点 国際化の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が広く公表されているか。

（観点到る状況）

- ・研究の国際化のため、本センターの研究活動の柱の一つとして、2015年度に大学間国際交流協定を締結した中国の安徽大学（国家教育部人文社会科学重点研究基地）などとの研究交流をHP上で明記している。
- ・第3期中期計画では、グローバルな連携ネットワークを整備・強化するため、海外交流拠点校や海外拠点等を新たに開拓することが明記されている（中期計画 38）

(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

近世日本の大名家資料群のなかで質量ともに最高レベルにある永青文庫資料などの熊本藩関係資料を対象とした研究を、外国人研究者によるヨーロッパ・中国などの歴史学研究の成果と比較検討していく作業は、研究の進展はもちろんのこと、海外交流の進展という観点からも非常に有益である。そうした観点から、中国などの研究拠点大学との研究交流の必要性を HP 上で明記している点は評価できる。

観点 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。

(観点に係る状況)

- ・本センターでは、文学部附属時代である 2010 年、交流協定を締結していたフランスのボルドー第三大学で、稲葉継陽現センター長（当時は副センター長）が講演を行っている。さらに国際的な研究交流を深める目的のもと、2015 年度に中国の安徽大学と大学間国際交流協定を締結し、2016 年 5 月には同大学で、学長も同席した国際シンポジウムを開催した（資料 D1-2-1）。永青文庫研究の成果を報告し、中国歴史社会研究との比較検討を行った。
- ・2017 年 9 月にモスクワで開催された国際歴史会議に、稲葉継陽センター長が報告者として招致された。ロシア科学アカデミーで「Popular Revolts and Violence in 16th Century Japan (at the Age of Civil Wars)」という演題で報告し、国際歴史会議の総会において高い評価を受けた。

D1-2-1 国際化に向けた活動の状況（過去 5 年間）

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
国際シンポジウム(件)				1	
国際学会発表(件)					1
本センターを訪問した外国人研究者(件)				1	1
本センターを訪問した外国人留学生(件)					1

(出典:永青文庫研究センター事務室資料)

資料 D1-2-2 国際的な教育・研究環境の構築に関する各活動の実施状況



(国際歴史会議〔於ロシア科学アカデミー〕における稲葉センター長の報告)

本年度の成果 1

稲葉継陽「Popular Revolts And Violence In 16th Century Japan」

国際歴史会議シンポジウム ANATOMY OF CIVIL WAR 2017年9月28日 ロシア科学アカデミー

●ヨーロッパでも日本でも、16世紀後半の社会と国家の混乱を収束する中から、近代国家の祖型となる国家の枠組みが形成される過程が存在。その過程では、権利闘争・実力行使の主体として、さまざまな勢力が歴史の表舞台に姿を現し、17世紀の国家形成のあり方に多大な影響を与えた。日本の状況、つまり戦国時代から徳川国家の確立までの過程を、こうした「市民戦争」の観点から把握し報告

「**敢て人命をそこなう得物（兵器）は持たず**」（百姓）

「**兵器も持たざる者を一概に鉄砲にて打ち捨てらるべき道理、決してこれ無し**」（武士）

●一揆の場における武器行使の長期凍結＝「天下泰平」は、百姓と武士それぞれの身分的・共同体的な自己規律によって、それも人命損失を抑止するための規律によって支えられ、実現された

→「天下泰平」の長期維持のために必要な規律は、幕藩権力から社会に押し付けられたのではなく、**社会の側から形成されてくる＝「共同体的規律化」**

→日本史研究のこうした進展は、「絶対主義」や「絶対王政」といった世界史上の概念を再考しようという、**世界の歴史学の動向とも関わる**

(2018年度みらい研究推進事業報告会における稲葉センター長報告資料)

(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

国際化のために定められた計画や具体的方策が、適切に実施されている。さらに、国際

歴史会議に本センター専任教員が招致されたことは、本センターの研究が国際的にも高く評価されていることを如実に物語る。

観点 活動の実績及び学生・研究者の満足度から判断して活動の成果があがっているか。

(観点に係る状況)

- ・本学を訪問した研究者には、永青文庫資料の閲覧が希望される方も少なくない。その際は、本センタースタッフが解説を行っている。2016年7月21日には、チューリッヒ大学（スイス）東洋学科日本学部門のラジ・シュタイネック教授が、2018年2月22日には、インドネシアの大学教員10名が永青文庫資料を閲覧した。いずれの事例でも、自国の歴史や古文書との比較で多くの質問が出されるなど、大変好評であった。
- ・また本センター教員が担当する日本史関係の授業に、日本文化や歴史に興味関心がある留学生が出席することがある。2017年度には、その受講生であるチューリッヒ大学（スイス）からの文学部特別聴講学生（私費）が本センターを訪問し、その際もスタッフが対応した。

(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

本センターを訪問した留学生・外国人研究者の満足度は高く、活動の成果があがっていると判断できる。

観点 改善のための取り組みが行われているか。

(観点に係る状況)

- ・本センターでは、2017年度の学内共同教育研究施設への改組と併せて、HPも刷新したが、その際にHP内の英語表記も大幅に充実させた（資料D1-4-1）。
- ・また、同年度に刊行した研究紀要『永青文庫研究』にも英文の論文題目を掲載した。

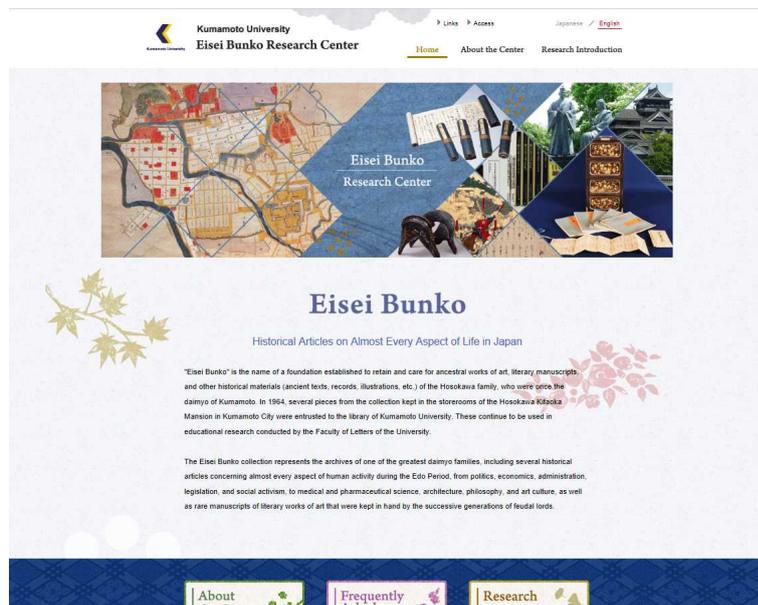
(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

HPの英語表記が以前よりも格段に充実していること、さらに『永青文庫研究』の前身でもある『永青文庫研究センター年報』には英文の題目が存在しなかったことを考慮すると、改善のための取り組みが行われていると評価できる。

資料 D1-4-1 永青文庫研究センターHP（英語版）



4. 質の向上度の分析及び判定

分析項目 I 目的に照らして、国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げていること。

重要な質の変化あり。改善、向上している。

本センターの国際化に向けた活動を、過去 5 年間にあたる文学部附属時代の 2013 年度からの推移を含めて検討すると、上記の結論に達する。

活動の状況は、本センターが開催した国際シンポジウム、専任教員による国際学会発表数、センターを訪問した外国人研究者を対象とした。以前に比べて 2016・2017 年度の数値が大きく向上している点が見て取れる。

V 管理運営に関する自己評価書

1. 管理運営の目的と特徴

管理運営の目的は、本センターにおける研究活動・社会貢献活動が円滑に効率的に推進できるよう、活動環境の整備、維持を行うことにある。

具体的に、永青文庫研究センターは学内共同教育研究施設であり、その管理運営はセンター運営委員会にてなされており、センター及び委員会の事務は教育研究支援部人文社会科学系事務課において処理されている。センターの事業及び運営に関して助言等を得る機能を有する組織として、熊本県教育庁文化課に永青文庫常設展示基金活用委員会が設置されており、学外の有識者から選ばれた者、センター長及び文学部長によって構成されている。運営委員会において学内他部局からの意見も取り入れ、永青文庫常設展示基金活用委員会において学外の意見も取り入れながらセンターを運営している点が特徴である。

[想定する関係者とその期待]

熊本大学学内組織と地域市民・行政から、永青文庫資料をはじめとする熊本藩関係資料に関する基礎研究の推進と、研究成果の社会還元のための継続的実施が期待されている。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

運営委員会において学内他部局からの意見も取り入れ、また永青文庫常設展示基金活用委員会による外部評価の継続的な実施と、そのフィードバックの反映がなされている。

【改善を要する点】

専任教員2名（うち1名はセンター長）と有期雇用の特別研究員1名という専任スタッフの規模に対して業務量が過重であり、多忙状態が継続している。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目Ⅰ 管理運営体制及び事務組織が適切に整備され機能していること

観点 管理運営のための組織及び事務組織が、適切な規模と機能を持っているか。また、危機管理等に係る体制が整備されているか。

（観点に係る状況）

永青文庫研究センター運営委員会の委員長は、センター長が務めることになっており、委員長は委員会を招集し、その議長となることになっている。センターの意思決定機関であるセンター運営委員会は、このようにセンター長が自ら直接運営している。センター及び委員会の事務は、教育研究支援部人文社会科学系事務課が担当している。

専任教員2名、特別研究員1名、事務補佐員1名、兼務教員3名（いずれも人文社会科学研究部准教授）の体制であり、適正な規模と機能を持っている（資料 E1-1-1）。また、年度毎に教員、職員の役割分担表を作成し、効率的な組織運営に努めている。

危機管理については、「熊本大学における大規模災害対応基本マニュアル」、「国立大学法人熊本大学危機管理規則」、「熊本大学危機管理体制」の内容をセンター内に周知している。科研費等の不正使用防止への取り組みについては、「熊本大学における研究活動の不正行為の防止対策等に関する規則」をベースに、センター教職員に周知されており、「科学研究費助成事業の執行等に関する説明会」への参加や「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」など関係資料も周知されている。さらに、情報セキュリティや個人情報保護についても、構成員の意識向上に努めている。

管理運営に関する方針は、「熊本大学永青文庫研究センター規則」に定められている。本規則に、管理運営に関わる委員の選考、受入れに関する規定や方針、及び各構成員の責務と権限が明記されている。各関係者との懇談会に相当する資料として参与会開催記録、議事録に確認できる。

資料 E1-1-1 永青文庫研究センター運営委員会等の構成

(2) 会議

<1>永青文庫研究センター運営委員会（学内）

センターに、予算、人事、運営等の管理運営に関する事項を審議するため、永青文庫研究センター運営委員会を置く。

- センター長
- センターの専任教員
- 文学部長
- 大学院社会文化科学研究科長
- 附属図書館長
- 文学部又は大学院社会文化科学研究科の専任教員のうち、日本史学・日本文学及び歴史学を専門とする教員 各1人
- その他センター長が必要と認めたもの 若干人

<2>永青文庫常設展示振興基金活用委員会（学外）

永青文庫に関する調査、研究、事業の実施方針、業務の進捗状況等を評価・監視する機関として、熊本県教育庁文化課が所管する「永青文庫常設展示振興基金活用委員会」が設置され、本センターの研究教育活動状況进行评估する。

- 会長（永青文庫常務理事）
- 会長代理 熊本県立美術館長 / 熊本大学文学部長
- 永青文庫研究センター長
- 本学名誉教授等 2人
- 文化庁美術学芸課（工芸・古文書担当調査官）

（水準）期待される水準にある。

（判断理由）学内共同教育研究施設への改組によって、適切な運営体制になった。

本センターは平成21年4月に文学部附属センターとして設置されたが、平成29年4月に学内共同教育研究施設に改組され、それまで1名だった専任教員に加えて専任准教授1名を新規採用した。この改組によって、研究と社会貢献を継続的に実施するための体制がとれるようになり、そのための予算も機能強化経費等として概算要求できるようになった。

観点 構成員（教職員及び学生）、その他学外関係者の管理運営に関する意見やニーズが把握され、適切な形で管理運営に反映されているか。

（観点に係る状況）

本センターはセンター長を含めて専任スタッフ4名の小規模組織であり、管理運営に関する意見やニーズは共有されている。永青文庫常設展示基金活用委員会（資料E1-2-1）には学外の有識者が参加しており、地域社会のニーズとして委員らからの意見も聴取している。種々の展覧会、講演会等においてアンケートを実施し、関係者のニーズ把握とそのフィードバックを行っている。

資料 E1-2-1 平成 29 年度「永青文庫常設展示振興基金活用委員会」資料

- 平成 29 年 8 月 3 日
永青文庫研究センター長
敬啓 榊原
- 永青文庫所蔵資料（新かり品・古文書）調査事業の
平成 27 年度・平成 28 年度事業実績
- 1 平成 27 年度 事業実績
 - (1) 永青文庫史料資料の詳細調査及び目録の作成
 - 『熊本大学寄託永青文庫資料 総目録 文学・文芸・音楽・絵画・地図・指図編/歴史資料編補遺』の完成・印刷納品
 - 古文書・古記録の詳細調査による目録の作成 (330 点完了)
 - 藩政史料群 (17 世紀前半以前「近世初期発給文書実文綴り」) 1冊ごとの目録の作成
 - 電子データ公開へ向けての再調査・校正 (約 25,000 点完了)
 - 分野(古文書・古記録、文学・文芸、絵画・地図、有職状宛)ごとの再調査・校正
 - その他
 - ・重要文化財指定に向けての詳細調査(文学・文芸)
 - (2) 永青文庫史料群を活用した研究、調査成果の普及と活用
 - 調査・研究成果の公表及び永青文庫史料の幅広い活用、情報発信
 - ・『日本近世の領国地域社会』書評会の開催(10月31日 於 熊本大学)
 - 『年報』第7号の作成・発行(300部・『日本近世の領国地域社会』等を収録)
 - フォーラム等の開催
 - ・11月1日14時～15時30分、第10回永青文庫セミナー
演題1:『道楽家三代と安芸・島原一揆』講師:藤原雅樹
演題2:『肥後の維新』の柱となった道楽家之山 講師:三澤純
(受講者:101名)
 - ・11月1～3日10時～17時、第31回附属図書館貴重資料展「細川家臣・道楽家の専断初期と明治維新」(来場者:332名)
 - (3) 上記(1)・(2)のデータを収めた CD-R 正・副1部を作成、文化誌へ提出。
- 2 平成 28 年度 事業実績
 - (1) 永青文庫史料資料の詳細調査及び目録の作成
 - 古文書・古記録の詳細調査による目録の作成(28～30年度)
 - 17世紀前半以前の初期発給文書実文綴り(『近世初期発給文書実文綴り』17,600点の1冊ごとを対象とした目録の作成)
 - 【実績】約2,700点
 - 電子データ公開へ向けての再調査・校正
 - ・平成27年に作成した総目録データの再調査・校正(28年度)
 - 【実績】57,700点について、すべて完了
 - ・審判している貴重資料の画像データと目録データの関連付けの実施(28年度～)
 - 【実績】17,958点/57,700点
 - (2) 施設への影響
 - 管理運営の図書館については、地蔵発生直後、センター長及び図書館担当で貴重書部内を確認、数点資料の落下が見られたものの、大きな被害はなかった。
 - 永青文庫研究センターについては、書庫等の落下は見られなかったが、大きな被害はなく、本事業への支障はなかった。
- 4 平成 28 年度 永青文庫研究センタースタッフ

センター長	榊原 樹雄(センター教授)
事業部長	三浦 泰(文学部准教授)
業務教員	竹島 一希(社会文化科学研究科准教授)
業務教員	安高 明(文学部准教授)
技術補佐員	後藤 真子
技術補佐員	藤本 豊治(9月末退職)
事務補佐員	坂口 史恵

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

永青文庫常設展示基金活用委員会では、前年度の事業報告と当該年度の事業計画を学外委員に示し、学外委員からの助言を参考にして、当該年度の事業を運営し、次年度の事業計画策定にのぞんでいる。また、本センターの研究成果が掲載された『永青文庫研究センター年報』や研究紀要『永青文庫研究』は、その存在をセンターHPや新聞を通じてひろく周知し、関係機関の他にも希望者には誰にでも無料で配布し、好評を得ている。

適宜、兼務教員を交えたスタッフミーティングも開催し、関係者の意見・ニーズを把握し、管理運営に反映している。

以上より、地域社会のニーズを把握し、適切な形で管理運営に反映されていると判断できる。

観点 管理運営のための組織及び事務組織が十分に任務を果たすことができるよう、研修等、管理運営に関わる職員の資質の向上のための取り組みが組織的に行われているか。

(観点に係る状況)

日常的に管理運営に関する情報共有を行っている。その他、「会計実務研修」、「情報セキュリティ研修」、「外部研究資金費獲得研修」、「研究不正防止研修」など全学の研修にも積極的に参加している

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

ごく小規模な組織であることの特徴を生かし、センター長が管理運営に関する情報を専任教員・研究員・事務補佐員と共有することが可能となる。このような情報と課題の共有が、これら職員の意識と資質の向上につながっている。

分析項目Ⅱ 活動の総合的な状況に関する自己点検・評価が実施されているとともに継続的に改善するための体制が整備され、機能していること。

観点 活動の総合的な状況について、根拠となる資料・データ等に基づいて、自己点検・評価が行われているか。

(観点に係る状況)

センター専任教員及び兼務教員の研究の活動状況について、論文、著書、資料、学術講演の状況や、センターとしての研究事業、社会貢献事業の取組状況を明示した『永青文庫研究センター年報』を作成・印刷し、永青文庫研究センター運営委員会と永青文庫常設展示基金活用委員会に提出し、助言を受け。それらに基づいて自己点検・評価を行っている。

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

専任教員の活動状況及びセンター全般の活動状況については、『永青文庫研究センター年報』に掲載されており、センターのHPにも記載している。センター運営委員や学外委員が大半を占める永青文庫常設展示基金活用委員会における、年度毎の研究活動状況の報告も自己点検・評価活動とみなせる。

以上より、センターの活動の総合的な状況について、根拠となる資料やデータ等に基づいて、自己点検・評価が行われていると判断される。

観点 活動の状況について、外部者（当該大学の教職員以外の者）による評価が行われているか。

(観点に係る状況)

熊本大学で全学的に実施される法人評価、認証評価の自己評価、組織評価の他に、本センターでは、年に1回開催される永青文庫常設展示基金活用委員会にて定期的に外部評価に相当するチェックを受けている。

(水準) 期待される水準にある

(判断理由)

継続的に永青文庫常設展示基金活用委員会を開催し、それによる評価が行われており、期待される水準にあると判断できる。

観点 評価結果がフィードバックされ、改善のための取り組みが行われているか。

(観点に係る状況)

永青文庫研究センター運営委員会と永青文庫常設展示基金活用委員会による助言を通じて、センター活動の運営管理に評価結果がフィードバックされている。

(水準) 期待される水準にある

(判断理由)

永青文庫常設展示基金活用委員会で得た評価をもとに、永青文庫研究センター運営委員会及びスタッフミーティングで運営を具体的に検討するサイクルが、フィードバックとして機能していると判断される。永青文庫常設展示基金活用委員会による意見をもとに活動を改善した例として、熊本県立美術館との共催展示会の充実がある。

分析項目Ⅲ 教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任

が果たされていること。(教育情報の公表)

観点 目的(学士課程であれば学部、学科または課程ごと、大学院であれば研究科または専攻等ごとを含む。)が適切に公表されるとともに、構成員(教職員及び学生)に周知されているか。

(観点に係る状況)

センターの目的は、本センターのHPなど公表されており、構成員に周知されている。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

目的がHPなどで適切に公表され、構成員にも周知されているため、期待される水準にあると判断できる。

観点 入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針が適切に公表・周知されているか。

本センターは該当しない。

観点 教育研究活動等についての情報(学校教育法施行規則第172条に規定される事項を含む。)が公表されているか。

(観点に係る状況)

教育研究活動の状況や成果は、『永青文庫研究センター年報』、センターHP等で適切に公表されている。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

『永青文庫研究センター年報』は、県内外の機関に幅広く配布され、公表されているため期待される水準にあると判断できる。

分析項目Ⅵ 教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。(施設・設備)

観点 教育研究活動を展開する上で必要な施設・設備が整備され、有効に活用されているか。また、施設・設備における耐震化、バリアフリー化、安全・防犯面について、それぞれ配慮がなされているか。

(観点に係る状況)

共用棟黒髪5において、活動が実施されている。耐震化、バリアフリー化などの配慮がされた建物である。

(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

共用棟黒髪5は、耐震化、バリアフリー化などの配慮がされた建物である。

観点 教育研究活動を展開する上で必要な ICT 環境が整備され、有効に活用されているか。

(観点に係る状況)

学内 LAN, 無線 LAN などが整備されている。

(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

学内 LAN, 無線 LAN などが利用でき、ICT 環境は学内の標準的な環境にあり、期待される水準にあると判断できる。

観点 図書館が整備され、図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理されており、有効に活用されているか。

(観点に係る状況)

共有棟黒髪5内に、センターの研究活動に関連する図書や古文書などを集めたスペースがあり、系統的に収集・整理されている。過去のセンター刊行物なども整理されており、構成員が容易に利用できる状況にある。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

センター活動に関係する図書等は、上述のように適切に収集・整理・活用されており、期待される水準にあると判断できる。

観点 自主学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

本センターは該当しない。

4. 質の向上度の分析及び判定

(1) 分析項目Ⅰ 管理運営体制及び事務組織が適切に整備され機能していること。

大きく改善、向上している。

第2期中期目標期間終了時点と比較して、学内共同教育研究施設化されたことにより、専任教員の増員と非常勤研究員の中期的雇用が実現された。また教育研究支援部人文社会科学系事務課による事務サポートは改組後も継続して得られている。

(2) 分析項目Ⅱ 活動の総合的な状況に関する自己点検・放火が実施されているとともに、継続的に改善するための体制が整備され、機能していること。

高い質を維持している。

外部委員による永青文庫常設展示基金活用委員会も継続的に開催されており、自己点検・評価とともに機能していると判断される。第2期中期目標期間終了時点と比較して、高い質を維持していると判断する。

(3) 分析項目Ⅲ 教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされていること。(教育情報の公表)

高い質を維持している。

研究成果は、『永青文庫研究センター年報』、センターHPなどで適切に公表されている。第2期中期目標期間終了時点と比較して、高い質を維持していると判断する。

(4) 分析項目Ⅳ 教育研究組織泳ぎ教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。(施設・設備)

高い質を維持している。

本センターの施設は共用棟黒髪5に集中して設置されている。貴重資料の大半を管理する本学附属図書館とは、研究活動上極めて協力的な関係を構築している。事務組織の教育研究支援部人文社会科学系事務課も同じ黒髪北キャンパス内にあり、緊密な連携のもとで組織運営活動が展開されている。

以上から、第2期中期目標期間終了時点と比較して、高い質を維持していると判断する。